

# ミット

特集

地下室からのレポート

—これは“奴らの言葉”による

プロレタリアートへの連帶声明である—

佐 新

藤 里

秋 良

雄 光

## 佐藤秋雄氏より

同志へ

私の『報告』について、同志が述べられるように、検事・デカ連中は、闘う人民闘士を分断するために、同志の間に不信をつのらせるために、諸同志の名前を挙げ、そして悪口を言うわけです。こうしてプロレタリア革命に対する、不信を植えつけようとするわけです。

私たちだからこそ、奴らの『思うつぼにはまらないために』団結しなければなりません。私はそのような意図もあって、奴らのしゃべったことを、私の恥もふくめて、あえて公表しようとしたのです。ところが私のあの『報告』を読んで、手をたたいて喜ぶ奴やふんがいする人が出てくるのではないかと正直のところ心配しているのです。こうゆう解らず屋は必ずブルジョア独裁、民主主義をはき違えている人達なのですが、それでもやはり長期的には説得し、非合法党の隊列にくみいれればと思っています。とにかくあの『報告』の真意をヨウゴしてくれることをお願いします。

私はミット7号の「獄中同志の手紙」は絶対に正しいと思っています。この警告は革命的な捕虜の会員になされた警告です。今だに守らず「小ブル革命主義反対」などと小ブル主義を丸出しにしているのは1人や2人ではありません。

佐藤秋雄

新里良光様

(3)

## 新里同志より

76.7.1. 東拘にて

同志へ

必ずしも〔3・15〕をかきあげた多喜二への思いのみではないが、同志市川の指示に基づく『報告』については、それが主要には獄外にあつて戦線をにいつつあるプロレタリアートとの関係としてあるかぎり、決してあいまいな形で書くことはできないと思っている。東拘に移鑑され、ペンを獲得したその日から記録しはじめたメモをよみかえし、整理していくにつれてそこにやつらー政治警察のテキストを見「ちゃんとした報告にしなければ」とますます思うようになっていく。

きっと幾多のプロレタリアートに「よし!!」と言ってもらえるようなものにしていきたい。

そしてやつらをして「あの野郎東拘に行ってまで、こんなもの書きやがって!!」とぜひ言わしめるものにしたい。やつらがかつてどういったやり口で革命組織の尊厳を一時的にではあれはずかしめてきたのかについては、「報告」をもってはつきりとおとしまえをつけるつもりだ。とにかく直接やつらが相手だけに久しぶりに燃えてくるものを感じている今日このごろです。確かにやつらがつかんでおり、しゃべった限りのそれであったとしても、かつての影の部分をも又書かなければならぬのはとってもつらい。しかしやつらがそれをダシにして転ばせようしてきた限りにおいて、やつらの手口としてプロレタリアートの前に伏せておくことはできないだろう。ただはつきりしている事はやつらが得意気にしゃべりまくったところの影の部分については戦線を離脱したメンバーをのぞきわれわれにとってはすでに獄中獄外を問わず清算しつくされているものであり、特に獄外での諸地下組織の存在はまさにそのことの証左としてある。今回のやつらの最大の矛盾はもうとっくに古くなっているものに依然立脚しそれで転ばせ得ると考えていたところにある。確かにやつらも又「報告」を読んでそこから多くを学び自らのテキストを改定するであろう。逮捕されたという事それ自体は一時的な敗北であるけれども「報告」の完成をもってこの負の現実をやつら政治警察に立ち向うプロレタリアートの勇気へと変えなければならない。それが今おれに課せられた、また充分はたし得る責任だろう。

おれの逮捕に多くを学び更なる前進を!!

(2)

## ミットの会より

1976年5月11日

午前七時四〇分ごろ、川崎市高津区新作五一一一三、アパート「第六伏見荘」を出たところにAが立っていた。

A 「あの吉徳運送の人は？？？君キムラことニイザトヨシミツやな」前面に立ちはだかり、とっさに腕節をつかむ。同時に四方にひそんでいた八、九人の者がかけより回りをかこむ。うち何人が両腕をとり、表通りから視角のきかない奥まつた路地へ移動する。

A 「キムラことニイザトヨシミツやな。この手のオケドあと。目のとこのほくろ。おい久しぶりやなニイザトくん。逮捕状見せたろか。ホラ手取つてよめよ。」逮捕状をおしつけ無理に取らせようとする。

A 「よめないのか？よむから聞いとけ。」とよみあげる。一九七一年当時の爆発物取締罰則違反容疑五件列記。逮捕状の発行期日は昭和五一年四月二八日であり、そこにはすでにアパート「第六伏見荘」名が記されている。身体検査をうけ、部屋とつくえのカギ、メモ帳、現金、国鉄定期券などをとりあげられる。左右の二人に手じょうでつながれ、車三、四台に分乗して移動する。途中、

「（？）さん等は別の作業についてます。」とA達。Aはキヤップとよばれている。信号まちの時など、一般車やバスととなりあわせると、左右の二人がそれぞれ背広で手じようをおおいかくす。面と向わないがこちらをかんさつし続けている。

警視庁本部に到着し、二九号取調室に入る。再度身体検査をやられたあと指紋を採取される。「手の力ぬけよ」とか「指がかかるな」といつて二人が失敗。「よし、わしがやろ。指紋どるのは十年ぶりくらいかな。」とA。しかし指紋台帳を左右アベコベにして取つた為これも失敗。四人目に清水が代る。「この中ではやはり清水君が一番上手みたいだな」とA。岡田はだまりこくつたまま立つてそれらをみている。指紋採取の途中にろう下でぼうしを被せられ、逮捕時の服そうで写真をとられる。「おひまつすぐ見ろよ」とカメラマン。はなれた所で「何かいそぐんだと言つてましたが。。。」とヒソヒソばなし。A 「逮捕された理由はわかってるな。弁解録調書どるから。。。君もしつてるだろ。名前や本せきには黙秘權ないんだ。。。逮捕されたことについて言う事ないか？目光らしたつて解らんやないか。黙秘だつたらへ黙秘だ＼と意志表示しろ！！」

『報告』にもあるように、5月11日、早朝、新里良光氏、佐藤秋雄氏、前田正治氏の3名は不当にも逮捕された。

新里氏 被疑罪条 爆取一条(71年当時の派出所など5件)

前田・佐藤氏 被疑罪条 爆取九条(新里氏の逃走を助けた疑い)

三氏とも完全黙秘。佐藤・前田氏を爆取九条で起訴できなかつた奴らは、爆取四条によるデッチ上げを行い、釈放すると見せかけて玄関口で再逮捕。これにも失敗すると、手あたり次第のガサ入れによって発見された劇物によって苦しまぎれに起訴したのである。

取調べは連日朝9時40分から夜10時半頃まで続き、それよりもっとおそらく11時40分まで続いたこともあったという。奴らの手口は、例によつてオドシたり、スカシたり、さらにオドシたり、スカシたりである。

「もう少し利口になれよ」といつて同志の悪口をしゃべりまくり、不信感をあおりたてたり、「お前らより警察の方がずっと人情がある」といつて砂糖菓子を見せびらかしたり、「君は指導者だろ。君たちの革命理論を教えてくれよ」とインテリの弱味をくすぐったりする。

取調べはこうして一人の人間と巨大な政治警察とのシビアな戦場である。

奴らがどんな教育を受けてき、「自供」におとしいれるためにはどんな手も使い、心にもないことを平然と言つてのける神経を、日々酒やさまざまな快楽に助けられながらやしなつてゐることを忘れないようにしよう。

そして我々、外にいる者達は、決してわるぎはなくともちよつとした不注意から、奴らにいかに情報をたれ流しているかを深く反省しなければならない。

尾行、盗聴、のぞき見、ガサ、接見での会話や手紙 etc

注意！ 注意！ さらに注意！ である。

3氏の逮捕に学ぼう

こちらは統一救対（五九一）一三〇一に電話を入れることを告知する。△弁護人は統一救対の・・▽と書き出したので「弁護人は・・」とは言つてないと抗議をする。

A 「△弁護人は・・▽はこっちが言つてることだ。おまえがとやかく言う事ないんだ。」

Aは「黙してかたらず」の調書を読みあげる。

A 「署名、指印せんのだな！」

A 「一度中へ入れて食事させますか」と手じようをはめられ、二人につきそわれて留置場の方へいく。受付でくつ下までもぬき、パンツ一枚になつて厳みつな身体検査をうける。留置場の看守は、腕時計や現金など押収物品を記した台帳に署名、指印をもとめてくる。

看守「署名しないならしないでいい。ただこちらは回りのこれだけの人が証人になる。署名しないんだからあずかつた金は使わせないからな。そのつもりでいろよ。」

留置番号「七〇番」を告知された後、体重や身長を計られ、脈拍など医者のかんたんな診さつをうける。留置場二階の一三房に一人入れられる。「おい、おっさん何やつたんや。な、何やつたんや？」と早速一六房あたりから声がかかる。「何もやつてない」「何もやつてない

のに引っぱられたのか。かすみが関マンショソ見学にきたのか。調べどいや? な、おっさんどこで調べられとんね。「公安や」とすかさず違つた房で「公安? 爆弾やないか」といふこと。

午後一時ころ、清水と高橋が身柄を連行しにくる。四一号取調室に入ると岡田がまつていた。

(取上げられた所持金は、二日後の弁護士抗議によつて△警視庁七〇▽の署名と指印で使えるようになる)

△警視庁七〇▽の署名と指印で使えるようになる)  
「お前、わしどこかで前に見たことがあるか。始め裁判官の心証最高にわるくかいてやるから。全く反省の余地なし。」

岡田「黙して語らず」でみんなおわるとおもつてるわけやな。よし見とれよ。後ではえ面かくなよ。なくなよ。裁判官の心証最高にわるくかいてやるから。全く反省の余地なし。」

2. 5月12→5月15日

五・一二 弁護士接見  
一四 一八房へ転房、依然独居 拘留尋問  
弁護士選任届提出

Bが調室に入る。

清水「心証つてわかるか。裁判官の心証つて？」

岡田「どうわしの名前おぼえたか? むかし同じ名前の首相がいただろ。」△黙してかたらずの供述調書に

「お前、わしどこかで前に見たことがあるか。始め裁判官の心証最高にわるくかいてやるから。全く反省の余地なし。」

岡田「かつてのおまえの同志達みんなが自分たちのやつた爆弾斗争は誤まつていましと清さんしてるやないか。お前らの言う総括してるやないか。みんな深く反省してさいごには「一日でも早く社会復帰したいので、どうか寛大な処置をおねがいします」と書いて責任とつてるやないか。かわいそうに○○なんか事件当時△才そこそこやないか。裁判官も人間だからな。心証てもんがあるんだよ。おまえ黙してなんの利益になるんだ。」「おれは全拘留期間黙秘でとおした。勝利した」と出てからみんなに言うのか。お前もパイになるとおもつてゐるのか。黙してパイになるのだとしたらそれでも黙しているよ。お前の場合違うんだよ。もう事件はできあがつているんだよ。今のケイサツはあまくないからな。みんな回りからバツチリ固まつてしまつてゐる。意味ないんだよ。お前はつかまつてしまつたんだよ。」

「黙秘だつたら「黙秘です」と言えよ。黙つてたら、

高橋「神奈川左派もニイザト一人かくまつた為にもう終りだ。次は△逮捕してやる。△はいまにげるのに必死だよ。そのうちにまた何かやるからいまはゆっくりおよがしているんだよ。」

岡田「小金井公園からいつしょに乗つていつたらよかつたのに途中でおりてウロウロするからだよ。なんで東京に出てきたんだよ。ケイシテつてすごいやる。特に公安部な。世界のケイシテだもん。」「おそれいりました」と言え。」

高橋「おれら公安部つてケイサツの中でもエリート中のエリートだからな。」

岡田「わしら国會議員なんかでもわるい事したら しょつ

びいてきてとり調べるんだ。社会正義の為に働いてる  
からな。議員なんかでもこわいことないんじや。」

清水「おまえA知つてんだろ □□だよ。□□」

清水「AもBもうすぐとつつかまつてくるんだ。カズヨ  
シもな。お前C知つてるだろ。時間の問題だ。お前が

ドジな為にな。お前だけやないか。女房もいないで右

にいけといえは右にいき、左にいけといえは左にいつ  
たりして。くやしいとは思わんのか。いつたいお前は

何がたのしみで三十三まで生きてきたんだよ。お前の

幹部とか称するやつはみんな今夜も女抱いてオマンコ

してねるんだよ。何回も言つただろ。お前はそんな事

に矛盾をかんじないのか。あいつらはお前の事なんか

何ともおもっちやいんじや。「黙つとれ」と言つ

たつて、何もお前の為思つて言つたんじやない。自分

の為なんだよ。自分がかわいいからなんだよ。いつも

後氣にして。逃亡生活はつらかったんだろ。老けてし

まって四〇位に見えるよ。くろうしつづけたんだろ。」

「カスカベにあるDの本屋いったことあるか。あいつ

の女房知つてるだろ。二人で本屋やつているよ。親か

ら三〇〇万出してもらつてな。」

岡田「お前しままでどこに行つてたんだ?九州の方はいつ  
たことあるか。北海道にいつたことないか?」

高橋「おれはお前がお前ところの女の一人位といつしよに  
住んでると思つたよ。」

つづられた書類をみながら

清水軍下のやつが隊長でな。そんなやつにまであごでつか  
われてかつこうわるいと思わんのか。」

岡田「お前の名前バンザワのことでも出てるな。八車の運  
転はAの奥さんがし、ひげをきれいにそつたニイザト  
が乗りくつて。」

高橋「おまえらがやつたなかでハネたのはユーロリヨー  
と地検の便所だけやないか。オレだつて爆弾位はつく  
れる。もつと威力のあるやつな。あんなのが爆弾と言  
えるか。子どもの遊びだよ。センコー花火じゃないか。  
お前らのやつたことはみんな遊びだ。お前らよりも  
つとすごいアサマ山莊にしたつて、あの後どれだけ世  
の中かわつたんだよ。」

岡田「おまえは自分が全国指名手配されてたの知つてんだ  
ろ。いつごろから知つたんだ?わからないように毎日

ひげをそつて、そのはげ頭をボーシでかくしつづけて  
きたのだろ。風ろなんかどうしてたんだ。トコヤには  
行つてたのか。あんなボーシなんか被らんとかつらす  
ればよかつたんだよ。アデランス、そしたらわからな  
かつたんだよ。かつら買う金無かつたのか。」

高橋「いや、一層丸ボーズにしてしまつた方が解らなかつ  
たかも知れませんよ。労務者みたいで。」

「よし、ひげがのびてきたぞ。いいぞ。拘留じん問の  
時には手配写真そつくりになるよ。お前はどうせ名前  
言わないのであくけど、手配写真と見くらべてすぐにお  
前がニイザトだと解つちやうよ。」

岡田「半歩も最初のときは黙して出られた。しかし〇〇  
が逮捕されてみんなしやべつてしまつたので再逮捕さ  
れたときは同じように認めてしまつた。お前の場合も  
二人が黙してたら出られたやろ。でも今となつてはも  
うダメなんだよ。」

清水「お前のアパートが腐るハムや生たまごどうしようか  
とここに電話してきてるんだつて。ほら紙やるから自  
分の名前と「処分して下さい」と書け。届けてやるか  
ら。・・あさつてきつとへんじするんだな。家主にそ  
う電話しといてやる。」

「A知つてるだろ。おれとこの女房はあいつの女房と  
同じ名前だ。前は学校の先生やつててな。いい女だよ  
。十十の女房知つてるか。あの女も酷いよな。てい主  
が刑務所くらいこむとさつさとわかいのくらえこんで  
いつしよに東南アジア行つてしまつたりして。前のて  
い主のこともは親に預けばなしでな。東京女子大まで  
出させてもらつてな。十十が言つてたけどあの女好き  
だつたんだつてな。毎ばんだつてな。十十がぼやいて  
たよ。××が出してる「ミット」な。今何号まで出で  
るんだよ。せつかくのワセダ止めちやつて。おフクロ  
学校の先生だよ。××のいもうとがあと継いでる。あ  
れもバカな女だよ。目先の事ばかり考えて。お前××  
の友達の△△知つてるか。イツチヤンな。あれも面白  
い男だよ。」川柳で『朝まらや小便までの命かな』  
って言うの知つてるか。もつと面白いやつもあるんだ。  
聞きたいか?聞きたくないのか。そしたら言うのは止  
めよう。お前どんな話が面白いんだよ。サケか?」

「日共がまた新しい事いい出したけどそれが何が解る  
か?」

高橋「ニイザト、お茶のむだろ?留置場はさゆだろ。これ  
は二〇〇日もしたんだ。お前の為に買つてきた。」

岡田「おいお前スギイケンジって知ってるか。その杉井弁

護士がケインシ序七〇に面会して来てるんだ。お前会うか。会いたくなかったらことわっていいんだからな。

そのかわり、一筆かけ。お前杉井って知らないんだろ。ことわるか。」

岡田「弁護士と何話したんだ。何にも話してないやで？裁判官の中にもときどきお前らの回し者がいるし、もと警サツ官でもムスメの為にバカな事やつてやつがおるけどな。お前らの弁護士な、あれは組織弁護士というのじや。あることないこと言うて何とか組織をまもりぬこうとする。」

「むかしわしが取調べたやつで近くの鉄工所で眞面目につとめているのもくる。時々近況を知らせてくれる。別に礼言つてもらおうとはおもつていなければ。弁護士よりもわしの方がくわしい思うぞ。」

検事「足を組むのは止めろ!! おい聞こえないのか？ 足をおろせ。足をおろせ!!」立つて無理に足をおろしにくる。

「そのかわりおれもそいつた無様な格好はしない。つくえには手をのせるけれどもその時には君ものせてかまわない。おれは企業爆破グループのダイドウジを調べた。かれらの事はそのうちおいお話ししてやるけ

どもな。」

「ひとに聞く前に君から先に名のれ。それからおれも名前を言う。それが礼儀と言うもんだろ。」

検事は全拘留期間を通じて一度も名前をあかさなかつた。

「黙秘だつたらそれでいい。「黙秘します」というくらいは言え。そのくらいは言えるだろう。〇〇や十人が君といつしよにやつたと言つてはいる。十の判決文の中にも君の名前が既に書かれている。事件はみんなもう解決してしまつてるんだよ。もう穴の中まで見られてしまつてはいる。君にはもう失うべき何物もない。墨でニイザトと書いた白旗を上げろ。おれも手伝つてやる。そら、もう一人手伝つてくれる人がふえた。白旗を上げろ。早く白旗を上げろ!!」調室に入つてきた岡田を前にしてどなりつづける。検事某はタイドをヒヨウ変させどなるくせがある。

高橋「どうだ。クソ出よるか？」  
高橋「きのう夜ねむれたか？ お、イキがつとるな。今日も大丈夫だ」か。

岡田「ちよつと立つて身体ほぐせ。深呼吸しろ」

清水「お前ら成田空港に反対しながらあそこの工事現場で土方して金かせいだろ。はん場にすみこんでな。矛盾してると思わんのか。お前は下つぱだからわからんないだろ？ Eがにげた後十人が代りに隊長になつたんだろ？ 四・二八で赤軍なんかからバカにされてアタマきたんだよな。それで爆弾斗争入つたんだろ？ Fはいま税理士の免許とる為にべんきようしてるよ。お前なんかよりよっぽどくわしいよ。お前らのことはみんな解つてんだよ。みんな。お前らのなかもみんな清算しているんだよ。○Xな、エルグーの花テツチヤンあいつにも会つた。あいつもいまでは眞面目にやつてゐるよ。会いにいつた事はないのか？ お前赤報のG知つてるだろ？ あいつの本名知つてるか？」

B 「電信柱が高いのも、郵便ポストがあかいのもみんな社会がわるいからか？ これはどとう派が赤羽で使つたのと同じものだ。これが何か知つてるか？ 手に取つてよくみろよ。家宅捜査でみつけた大事な証拠品だ。」  
△岡本理研ゴム？と書かれた4センチ四方位の品物を前におく。「違ひ人が来た。」と高橋。  
清水「そら待望の差入だよ。いつもうけにいつてやつてるんだから有難う位言えよ。」

高橋「同志のメンシだからな。のこさずにみんなたべろよ。権力のメシはくえないけどな。」

清水「食いきれなかつたら明日に回したらいい。取つてやる。無理してはらこわすなよ。」  
岡田「メシ食う時お前もきのうのマル青同みたいに△日本の抑圧されている労働者・人民のみなさん、マル青同は斗います。労働者のみなさん食事をいただきます▽つてエンゼツするか。拘留尋問の説明聞いてた連中みんなわらつてたよ。気違いやうかつてな。お前地裁で頭ゴッソンやつてた時となりに誰が入つてたか知らなかつたんだろ。サトウがいたんだよ。お前に「ガンバレヨ!!」と言つてたのに気付かなかつたのか？ サトウとマエダ知つてるだろ。四人で公園で何話してたんだよ。立川の食堂でめしたべて、一〇円だま何枚も使つて電話しただろ。やつてない？ ちゃんと後ろから見てるんだよ。」

高橋「〇六というのは大阪では？」

岡田「いやあまがさきもいける。すぐうしろで聞いてるのもしらずに「うん。そうか。よしわかつた。」誰のところに電話したんだ？」  
「し第一おとがしない。」

パックスキンで底がゴム状のくつを示す。

岡田「電話かけるときはいつたんにせダイヤル回してからふりかえって見るんだよ。それから違った場所に行つてさつきと同じ人間がいるかどうかを確かめてから本当に電話するんだよ。立食いそばにしてもお前みたいにしるまでのんてしまわずに食つたらいつ迄もしないでパッと立去るんだよ。どや勉強になつたか。お前も一つ位おしゃれよ。こつちはお前のためにおそらく迄講議してやつてるんだよ。」

清水「あー、ニイザト明日からはきびしく取調べるからな」

岡田「お前ここにきて何日目だよ。もうちょっとは気持の整理できたらやろ。事件にかんけい無いことくらべ話せるやろ。これはべつに調書とつてゐるわけじやない。事件に關係無いことでも一切話す気にならんのか。サトウやマエダも核心にぶれる事になると口をつぐむが他の事はみんなはなしてゐるぞ。身の回りの事からでも話していくか。生い立ちなんかから。」

「なぜいつ迄も黙してゐるんだ。その理由を聞かせてもらおうやないか。おい!!わしらをなめてゐるのか!!」

仁王立ちになりどなりつづける。

岡田が供述調書をとつていい時でも別のつくえにいる清水が岡田たちのしゃべつてゐる内容やこちらの動きを逐一

メモしている。

岡田「お前は本当に五件ともみんな自分一人でやつたのか。やつてないんだろ?いやこれはやりましたがあとのことについては何も知りませんとなぜ言わんのだ。そうせんと五件ともみんなおまえに被さつてくるぞ。やつたんならやつた、やつてないならやつてないとはつきりいえよ。黙つてたら共謀共同正犯になるぞ。黙していふといふことはやつたといふ事だな。第一何もやつてないものが逮捕されてきてやつたともやつてないとも言わんばかりいられないもんな。普通の人だつたら確實に気違ひよるよ。わしながら三日としんぼうできなさい。自分で首くくつて死んでやるよ。」

高橋「ニイザト新作つて日本こう管のりようの方か。おれのあたりくわしいんだよ。高速の下あたりに資材置場があるだろ。あの近くにあねがいたんだよ。おしゃつたなあ。もうちょっとでおれがお前をつかまえることができたのに。本当におしかつたよ。」

「ニイザト、おれの事調査官で言うんじやないぞ。調査官というのはえらい人の事なんだからな。あの人なんか調査官だけどな。」岡田を指さす。

命の手段として爆弾斗争やつたんだろ。社会をよくしようと思つて理想にもえてやつたんだろ。自分らはこういう理想でやつたんだとなぜ主張できないんだ。遊びじやないんだろ?」

「お前刑務所から出でても歯ぬけでフガフガ言ひながらつえついて革命指揮するか?出所するときには同志達が旗もつてむかえてくれるのか。暴力団みたいにのる。警サツ官だつてみんながみんな自民党支持といふわけじやない。共産党はまあいないけど公明党や社会党に入れるのはいじる。あいつらがへこれはたいへんだけつて火えんбин法に賛成したのは見えすぎた力モフラーじゅなんだからな。本当は暴力革命してないんだ。けど今そんなこといふとまずいからな。警サツ関係の人がいつも自民党から立こう補するだろ。あれにはみんな不満をもつてる。」

「おれはこうやつて警サツの内部事情までお前に話してゐるやないか。取調べでこんなこと話すやつは他にないぞ。」

岡田「ドンとぶつかつてこいや。お前わし等本当にバカにしてゐるのか。話しても解らん思つてゐるのか?いままでお前らの仲間と何回も論争してきたぞ。お前らは革

高橋「テレビまで押入れにいれて。会社の同りようが遊びにきたときプロレタリアートがテレビなんかもつてたらハジだもんな。だから押入にかくしていたんだろ」

清水「いつもどこで酒のんだんだ。赤ちようちんでレバサンドとビールか。アパートではのまなかつたのか。あのアパートの権利金誰に出してもらつたんだ?」

「オレ上に電気カミソリあるからかしてやるよ。差こみ付いてるからこどもつかえる。いらんのか?」

検事「おれの調べはいつも一対一だ。警サツ官はみんな出ていくつてもらうし、もちろんいつしよにいる書記も部屋から

新作だつたな。あそこらへんには爆弾犯人が集まつてゐるのか。神経質そななこまかい字でノートとつて

それにお前さんはそうとうのロマンチストだ。アパートの家主から職場の人達。お前さんこと誰一人わるくは言つてないな。こどもが好きでな。それともなくか。それも下心があつてやつた事か？オオカミ少年やお前さんらにしろ、とにかく何かをうつしるのが好きらしいな。その事自体になにか快感をおぼえるのか。爆発性化合物やじゅうほう火薬店などを書き出して、このノートをみるとお前さんは今でも爆弾とじゅうに異様なきょう味をもつてそれをすてきれんらしいな。お前さんらはいつたい何しようとしてたんだ。第二第三の真岡を計画してたのか。鉄パイプの切り方なんか聞いてあつたな。しかしお前さん自身が書いたものはどうにもない。みんな本や人のかいしたもの丸写しだ。これだつてそうだ。何かもつともらしいことかいてあるようだけども当り前の事しかかいてない。ハタバコをすわない／なんていちいちかかなくても、誰が考えても解ることだ。常識だ。みんなは残業しているのにお前さん一人だけやらいで、サトウやマエダとあつて何を相だんしてたんだ。何をやろうとしてたんだ。おい!!アパートで何をしてたんだ!!』押収してきたといふ大学ノートをバンバンたたきながらどなりつけける。

「まあ、しばらくお前さんとつきあうことになるけれどもな。ブンド神奈川左派、神左といわれているやつだ。つかまつたりして統一戦線を組む相手が違うんだよ。どうしたきつかけでお前さんがタイホされたかは知らんだけだ。まあこれはお前さんの為にふせといつてやるよ。意外だつたのはお前さんとこからの押収品にオザキらの裁判資料が無かつたことだ。公判記録なんかみたこともないのか。もつとも弁護士のところへいかなければないだろ。まあこれはお前さんの為にふせといつた機会があれば、吉田老人の公判記録をよんでもみろ。裁判官はじめは被告というだけだ。お前さんのことは他から明明白白われてしまつてあるんだよ。お前さんもいつか機会があれば、吉田老人と言つていたが、裁判の最後の方では被告といふことばがなくなり、自ら吉田翁とよんでいる。それは吉田老人の何十年にもわたる無罪主張に心うたれたからだ。あくまでも自らの無罪を立証しようとする熱意にな。四〇才のマインホフもモリツネも自殺したけど自殺は最大の敗北だからな。自殺なんてするなよ。』ダイドウジも自分の立場を堂堂と主張した。最後に「われわれの後に続くものがきっとあるだろう」と言つてな。お前さん達の路線をきかせてみろよ。検事としてではなく聞こうじやないか。はなすのがいやだつたら紙にかけてみろ。ボールペンもほらここにある。お前さんらの革命理論」

### 3. 5月16日→5月22日

一七日 弁護士接見、夜房にかかると二人の同房者がねていた。

一八日 Cが調室に入る。

二二日 Dが調室に入る。

岡田「オス!!朝来たらあいさつ位しろよ。あいさつするのもいやか。よしよ早よう。どや気分いいだろ」

いつも朝は「どやねむれたか？」ではじめり、夜「これから房に帰つて考えるか」でおわつた。

清水「こいつに石けんばことちり紙、かみそり買うのさいそくされちゃつたですよ。まだですかって」

高橋「ニイザト、今日どんな天氣かわかるか。ひさし振りに

いい天氣だよ。千鳥がぶち散歩にいくか？」「ラクエンの巨人戦みにいこうか。手じようはめて。全国区立候補のお前にがしたらそれこそ首だからな。かあちゃんとガ

キいるのにたいへんだよ。昨日の巨人戦どつち勝つたとおもう？・・・誰にきいたんだよ。看守にか。看守のやつらこのごろ又だらけてきてるな。看守というのはカスのあつまりなんだよ。警察の中でもどうしようもない連中がみんな看守になるんだからな。」

岡田「お前、前公安部長の切ぬき写真もつてただろ。ナカジ

マジロウさんに来てもらうか」

高橋「お前とこからの押収品、今みんなで分セキしてん

だ。もうすぐこつちにまわつてくるだろ。」

高橋「ケンジュウ図鑑持つてただろ。サンダンジュウのこともかいてあつたけどあんなもん威力ないんだよ。一つや二つ当たつたつてどおつてことない。よっぽど近くでうたないかぎり死なないんだよ。アサマ山荘以後警察も研究して、今ではビクともしない服があるんだ。おれたち警察は同りようの死をムダにしてないんだよ。警視総監のおくさんな、おれも知つてるけどいい人だつたよ。」

清水「警察の本とかはあるけど自分ところの機関紙なんかはひとつも無かつたな。どうしたんだよ」

高橋「ニイザトへ警察白書／や／警察公論／なんかお前が読むものじゃないよ。『警察公論』はおれも取るには取つているけれどもみんなは読んでいないよ。それに『警察学論集』なんて警視庁でも幹部連中しか見ないぞ」

岡田「おまえあんなに警察のこと勉強したんだから一層のこと警察官になつちやえはよかつたんだよ。」

高橋「身長がたりないですよ。」

清水「ノートのラン外にまで氏名〇〇〇〇〇〇〇、ツマなんとか、子供なんとかつて何べんも書いてな。覚えようとして。忘れたらそれこそたいへんだもんな」

高橋「お前のノート見たら、みんなすごくケガしてるな。主任というやつのケガはデカかつたのか。監督署から来たんだろ。それに出入がはげしいな。保険も何も無いバーのおばさん達がケガしたらたいへんだよな。

会社は充分な保証をしなかつたみたいだけど。もつとも一〇人そそこの会社だったからな。そこに前の会社で組合のケイケンがある紅一点がいたり、東京時計からながれてきたやつがいたんだろ? 何とかしようつて話しあつてな。組合つくるうつて盛り上つたんだろ? でもせつかく盛り上つたのにお前が爆弾で逮捕されてみんなパアだよな。オバサン達はお前が会社に來たら暗やみの中でかすかな光を見つけていたのにな。」

清水「お前はそういうつたヨコハマセーミツの人に何もいふことはないのか? かつての同りよう達に。何もおれたちにでなくたつていい。同りよう達、人民に向かつてアッピールをしてやれ。思つている事を。紙とペンやるよ。」

高橋「ニイザトお前の性格から爆弾なんて大それたこと考

きにはまだ元気だったけれど、このあいだの電話ではねたきりと言うやないか。お前はそんなおふくろの手を邪魔に振りはらうのか。おふくろなんかどうなつてもいいと思ってるのか。おやじが八〇、おふくろ七五おまえが刑務所出てくる一〇年後まで生きてると思つてゐるのか。ホラ、これがおふくろのサインだ。別れを告げろ。さようならといつてやれ。」

高橋「テツオにいさんのヤチヨさんか。二三才だろ。そろそろけつこんする時期だし、今が一番遊びたい年頃だよ。でもけつこんする時は必ず相手が身元調べをする。おじさんが爆弾犯人だなんてまずヨメにもらつてくれないよ。しまどる毎晩ないてるよ。」

清水「一万六千円も持つてゐるんだから、そのうちから五千円でもおふくろにおくつてやれ。ここにいてもあまりつかわないし一万円もあれば十分だ。手紙書いておくつてやれ。△これはあやしいお金ではありません。ぼくがちやんと働いて得たお金です△つて。」

岡田「△ヨシミツは瀬尾高圧で賃金が低いのでわかる者達がかわいそさだとよく家で話しておりました。私はよくは解りませんがヨシミツはわかる者達を集めて先頭に立つて会社の偉い人と交渉したりしてゐるようでした△この瀬尾高圧つてどんなくらいの会社だったんだ

よ。それにしてもお前イキなことやつてくれるやないか。」

高橋「はたらきながら学校行つたんだろ。貧乏だったからな。瀬尾高圧で首切られて裁判では勝つたけど組合がよわいので職場には帰れない。そのあたりからお前の人生はくるいはじめたんだ。」

岡田「おふくろだけやない。兄さん達の調書にまで△夏には近所や私のことも達を海水よくにつれていつてくれました△つて。気の優しいすなおな子ですと書いてあるやないか。そういうつた兄さん達のゆめをうらぎるのか。革命や組織のために仕方がないし、親なんかどうなつてもいいのか。」

「△ここでお前が△ヨシミツは革命のために生きます△と言つたらおふくろさんだつて悲しいけれどふんぎりがつくやないか。私のヨシミツは死んだんだと。一刻もはやく言ってやれ。それがお前にできるせめてもの親こうこうだよ。△優しいおふくろさんやな。今は病氣で床に伏していつるけれどせめて新幹線にのれるようになつたら一日でもはやく会いにきたいといつてるんだよ。ふつうはこんなふうに言つてくれんぞ。お前はそんなおふくろさんが目にうかばないか。目をちよつととじてみろ。ここでは何もはずかしいがることない。△おかあさん!!△つてよんでもろ、いいから。」

えないで組合運動でもやつてればよかつたんだよ。」

「△お前は自分が全国指名手配されてるものだから職場の活動も表面だけではなくてはできなかつたんだろ。会社はちよつとでもへんな動きがあるとすぐケイサツに電話かけてくるんだよ。そしたらお前パアだもんな。」

岡田「わしら公安が労働者のてきだというけれど、そこにはなんか家で近所の集まりに出ていくけれど、そこには会社に組合のある人もきてる。それでもわしら仲良くやつていてるぞ。」

岡田「おまえが読みたくないでも今から読んでやる。」

カナ調書を部分的に読みあげる。ヨシハル、テツオ調書はボルペン書きなのにカナ調書だけはエンピツで字がラン

-12-

外にまではみだしていたりしてわざとランザツに書かれている。

清水

「お前こどもないから解らんと思うけど、親なんてみんなそんなもんだよ。」

「これが家の電話番号だ。良く見て覚えておけ。電話だつてしたことないんだろ。心配ばかりかけやがつて。

お前のおふくろは調書で四年かお前が家をとび出してから一切連絡がなかつたと言つてるんだからな。」

岡田「もしここから電話しておふくろが出たら、お前わしと代るか？ ここからでも市外電話かけるんじや。お前自分でかけるか。」

高橋「こいつへ本当に電話していいの？ ／＼だつて。お前につたいどこに電話する気なんだよ。おふくろさんには？」

おふくろさんなんて名前だよ。な。おふくろさんニイザトカナさんか？ そしたらお前の名前はニイザトかな？」

清水「今みたいにこいつがニコツとわらつた時なんか目のあたりがとつてもいい感じになつて本来の姿に戻るんだがな。こいつは本当は優しいやつなんですよ。貧しい労働者のためを思つたり、会社でけがした女工のこと言われたら本気になつてないたりして。」

岡田「お前とこの家に電話をしたら最初おふくろさんが出てきてお前が逮捕されたことを聞いてすぐになき出しあんだつて。そんなおふくろさんを見かねてミチコね問題をすりかえるなよな。」

岡田「弁護士がニイザトヨシミツについて接見に来てるんだけど、お前ニイザトか？ 検事が出した指定書にはニイザトヨシミツとなつて、それをもつて弁護士が来てるんだよ。お前ニイザトヨシミツか？ 何度言つたらわかるんだよ。ニイザトでないやつをあわせるわけいくか。どやお前はニイザトヨシミツやな。この野郎なめやがつて！」

高橋「まあいいや、こんなバカ相手にしてもしかたがない。はやくつれていく。ホラ、来い！ いつまでうすらとぼけてるんじや。『手じようをはめられ接見室へ。』

清水「弁護士におふくろのこと言わせてないてしまつたて言つたんだつて。そしたらこいつ弁護士からへないたりしたら絶対だめだ／＼としかられたんだつて。バカだなこいつは。弁護士にそんな事まで話すなんて。」

えさんが電話を取つておふくろをかばおうとしたけど

おねえさんもワンワンなき出してな。母親とムスメが電話の向う側でかた抱き合つてないで、調査官はあまりかわいそなうなので何も話すことができずそのまま電話を切つたというやないか。おふくろさん今は止めているけど最近までパチンコ屋で働いてたんだつて。ミ

チコさんは勤めに出てるみたいだけどな。おふくろがどんなふうにして部屋の中にいるか思いうかべることできるだろう。今までどんなに苦労してきた誰からもうしろ指差されることなく人生を送つてきた二人やないか。そんなおふくろらを外歩けんようにするのか？」刑務所に行つたらおふくろ死んでも電報なんか来んねやぞ。』お前はおふくろと気持が通じてるつて言うけど、全然通じてないやないか。おふくろはこうして自供を勧めているのにお前さんはそれにこたえてないやないか。一体どこで通じてるんだよ。／＼何も話そうとしないし全く反省の色はありません。おかあさんかわいそうだけれどもどうかあきらめてやつて下さい／＼って電話するか？ そしたらお前のおふくろさんどうなると思う？ お前おれがうそついてると思うのか？」

清水「／＼社会のこと何も知らない年老いた母に電話するな。悲しませるな／＼やて。なにを偉そうに言つてるんだよ。それまず第一に聞くんだよ。」

高橋「中核や革マルのジヤリミたひなやつでも、おふくろのこといわれたぐらいでないたりせんぞ。あいつらはおふくろが調室に入つてきてワンワンないても／＼母ではありません／＼と言うんやぞ。お前ジヤリ以下だよ。」

清水「弁護士とあつたらニコニコしやがつて。弁護士にあうたびにつまらん取調べの事なんか話さないで自分のこと聞いてみるんだよ。／＼弁護士さん、調べでは一〇年以上つて言つてますけど私どうでしようかね／＼って。」

高橋「弁護士は本当のこと言わんだろうな。医者だつてガンでしにかけている患者には決してガンだとは言わんだろう。あれと同じだ。大丈夫だつて言うだろ。」

高橋「お前押収品目録わたしたんだろ？ 今ごろ弁護士へああ、こりやだめだ／＼って言つてるよ。消火器だろ。」

清水「アパートどうするんだよ。拘留バイなるからあのまま置いとくのか？ お前弁護士にきいたんだろ。日よう日に救対の連中が引払つたつて。」

岡田「調室でいうかどうかは別にして、おふくろさんがきだらお前どうする？ あうか？ それとも／＼ケイシ序七〇の母ではありません／＼とでも言うか？ お前弁護士にきいたんだろ。じやないんだよ。そんな事お前に関係ないんだ。連れてくるのはわしらなんだから。そしたらお前部屋中に

C 「 げて回るか？」

C 「 岡田君がどうしようもないと言うので来た。」一時間近く調査にて直接調べたのは四〇分位。

高橋「 あの人は課長でケイ部だ。もうすぐ警視になる人だ。」

C 「 おれが神左の責任者だ。一切の新聞発表はおれがやる。要するに君はボーレイに取付かれているんだ。君に取付いたボーレイを払えるのは君自身しかない。それには自分でいつも早くお母さんとウトさんの問題を解決することだ。君は赤線に行つたことあるか？あるな。その時にもつて行つた？ウトさんの問題どう思つてるんだ。・・・バカヤロウ!!なにが△何も言うことありません▽だ!△何もいうことありません▽じやないだろ。言うことはいつぱいあるんだよ。事件の事に付いて。君は論理学についてあまり得意じやないらしいな。おれが今から少し講義をしてやる。英雄色をこのむということばがあるな。そして若者は夢を見る。・・・」三段論法についての講義をはじめる。

「 君は○×ねえさんを知つてゐるな。来てもらうか？こ二・三日新聞発表するのを止めておく。しかしその後どうなるかは君しだいだ。よし握手しよう。」手をさしのべる。

高橋「 敵とは握手できないよ、な。」

せるからな」

岡田「 四方が白いカベでまどといつたつてこんな小さなぞきまどだけだ、食料出し入れするな。高い天井と時たま聞こえるのは看守のコツコツという足音だけ。そんな雨がふつてもわからんようなシーンとした中で本当に何年間もおれるか。独房で。一〇年間つてカンタンにいうが長いぞ。懲役になつたらちよつとした仕事はさせてくれるけどな。わしはお前がたえられるような人間とは思えんけどな。赤軍のマツウラもマツダヒサシも完全に気がくるつた。おまえもどこまでそうやつて黙りつづけていられるかやつてみるか。」

清水「 お前松沢病院知つてゐるだろ？松沢病院行きだ。きつとおまえを松沢病院におくつてやる。」

岡田「 そうやつてじつと一点をみつづけるとこや、男が脱いだ服をキチンとたんやりするところは気がくるつてきた証拠だ。わしなんか二分と一所見れないよ。」

清水「 こいつわらつてるよ。お前の事いつてるんだよ。こいつ本当におかしいですよ。いよいよダメだ。明日精神病院行くか？松沢病院行ってみてもらうか？」

岡田「 爆取一条、私文書、公文書偽造、少くとも三ヶ月は拘留うてる。それがみんなおわつてから凶準だ。新幹

C 「 今日はこれで帰るけれどもな。何か話すことがあつたらよんでもくれ、いつでも来るから。」

岡田「 お前弁護人選任届に自分がニイザトヨシミツだつて署名したんだろ。ここで名前くらい認めたつてどうつてことないやないか。なんでいつまでもこんなつまらんことに意固地になつてゐるんだよ。お前がニイザトだつてことは不退去の指紋から写真からみんなわれてしまつてゐるんだよ。こうして拘留つてゐるのも裁判官もお前がニイザトだと認めたからなんだよ。おふくろさんはお前の写真見て△もすこのヨンミツです△と言つてゐるんだよ。タイホされた時にろう下でとつたおぼえてるだろ。カラーでな。」

「 U は大阪にておこつてゐる。世間の人は U が爆弾犯人とつながりがあるとしか思わないし、U のこどもらまでが後ろ指をさされている。お前こどもらもやぞ。かわいそやないか。そのメイワクをかけた、U に対してすら△何も言つことはありません△とはどういうことなんだよ。他人なんかどうなろうと知つた事じやないのか？お前らの革命はそんなもんか？」

高橋「 おまえがそうやつて黙つてようとするのは勝手だ。ただおれらはおまえにしやべらせるのが仕事なんだよ。甘く考えるなよ。おれは絶対にお前をしやべらせてみ

線で京都行く場合とむこうからここへ調べにくるのとはどつちがいいんだ？京都府警の逮捕状一応ほおつておくわけにはいかんからな。三ヶ月そうやつて黙しているのは辛いぞ。たえられるか？それにこれからも別件が出てくるやろし、又又拘留だよ。」

「 お前はあんなねるところとくそするところがいつしよになつてゐるような留置所生活がすきなのかな？自分の性格にあつてるのか？お前はねたい時にねて起きたい時に起きるような生活がしたいと思わんのか？」

「 お前診察申し込んだのか？今日は先生やすみだから明日に回すつて、留置所からの連絡だ。」

高橋「 なんやお前どこか悪いのか？疲れたのか？・自覚しよう状はないけど一応診てもらうやで？ふざけたこと言うやつだなこいつは。お前なんかどこも悪いといかないんだよ。お前は一銭の金も払わないけど、医者だつてただじやないんだからな。お前自分をなんだと思つてるんだよ。明日申しこむんじやないぞ。」

岡田「 差し入れのメシはみんな食うし、ちよつとは考えよう。一日位は目真赤にして出てこいや。房にかえつたらすぐバッタングーとねむつしまわんと。ちよつとは事件の事をこれからのことを考えて夜ねむらんと來い。」

房にかえつたらねる前に毛布の上に正座してたつた十分でもいいからおふくろのことを考えてやるんだよ。

でんわではおふくろはメシがのど通らん、戻すと言つてきてるんやぞ。夜ねむれんと言うてるんやぞ。おやじさんだつて乳母車みたいのをつえがわりにせんと歩けんというやないか。」

清水「おい、お前ちよつとたて。お前留置所ではとつてもすなおなんだつてな。元氣があつて明るいんだつてな。看守がそう言つてる。われわれを前にした態度と全く違うやないか。そういうのを二重人格、八方美人というんだよな。あんまり裏腹な態度をとるなよ。ここでのダイドがお前の信念に基いたものなんだつたら留置所でも同じように貫けよ。」

高橋「こいつが今△解つた△と言つたのは明日からは点呼の時へんじしないつもりなんですよ、きっと。」

清水「看守もわれわれと同じ権力側の人間なんだからな。お前みたいな態度とられるところちが片腹いたいよ。ここで黙つてゐみたいに点呼のへんじするなよ、な。」「看守にひげそらせてやつてくれつて言われましたよ。後からそらせますか？」

高橋「なんや、留置所でひげのばしたらいかんのかな？」

検事「お前さんが黙り続けるから、家系になにか問題があつて、そこに解決のいと口があるかもしねないと思つて調べてみた。別に何もなかつたな。テツオ兄さんも元氣だな。おれはお前のねえさんと同世代だ。一つ二つも違わんだろ。」

「お前さんがないたつて聞いたけど、なぜないたんだ。もつともなくことによつて自分を慰め気持が安まるけどな。・・・さつきケイサツ官もかたの荷を一つ一つおろして言つてはやく樂になれと言つてたな。おれがいる事もあると良くにたものだ。まずお前さんはUの問題を解決してやれ。他人のいたみを自分の痛みとして感じとつてやれ。そういう人間になれよ。・・・大阪のUはとてもおこつてゐる。とんでもないやつだつてな。直ぐにでもここへ来たいといつて。電話一本で明日にでもとんでくるだろ。△何もいうことはない△というのはUにきてもらいたいということか。そしたらせめて新幹線代位は払つてやれ、持つてるんだから。それともなにか。ウトが自分の住民票を使つていいとかしてくれたとでもいうのか？」

「ほらここにもお前さんの名前が出てる。△被告人がタケヤやニイザトに近いうちに爆弾斗争に入るなどとタケヤとお前さんにあいついて△ヤツタ!!ヤツタ!!△つて喜んでる。お前さんらがやつたことはまるでマスターべー・ションじやないか。女でいえばオナニーだよ。△ヤツタ!!ヤツタ!!△つてな。お前さんはつぎつぎに放火しては興奮している放火犯人と同じだ。まるで爆弾屋だ。おい、何の関係もない人達をきずつけて喜んでる爆弾屋、なんとか言えよ。くやしかつたら何とか言つてみろ!!ええ爆弾屋。おおかみ少年グループじやなく実はお前らこそ爆弾マニアじやなかつたのか?ええ、おい、何とか言つてみろ!!」かおを真赤にし、広げられたミット五号をバンバンたたきながらどなり続け

「言つたかもしぬせんが△つて。もうおわりだよ。」「たしかに日本とちがつて韓国のはきびしいと言われている。新聞にのつたのが陳述の主旨だけだから断言はできないけれど本当に金芝河さんが自らを共産主義者でないと言つたとすればおれはやはりにげると思う。」金芝河に付いて二・三〇分の評論が続く。

「朝日新聞に走資派批判運動の中でおこつた天安門事件で暴動を指揮した主謀者といふことで容疑者が三人だつたかじゆう殺刑に処せられたつて報道されてた。おれはまず第一にあの暴動が組織的に計画されたものだつたかどうか疑問だけど、はたして三人の取調べで十分な事実関係の調査がなされたのかどうか、裁判が法にのつとりやられたのかどうか、もし法にのつとりやられたとしたら中国の司法制度には大いなる疑問をいだかざるを得ない。お前さんはあいづた即決裁判をどう思うか?」

「お前さんがしゃべらないのは本当は考えがまとまつていなかからじやないのか。・・・おれにとつてお前さんは役不足だよ。」

「お前さんらがやつたことは革命とはなんの関係もない。交番にウナギ爆弾を置いてきて、それも気持がそなわつてないからひつくりかえしたりしてな。それで

タケヤとお前さんにあいついて△ヤツタ!!ヤツタ!!△つて喜んでる。お前さんらがやつたことはまるでマスターべー・ションじやないか。女でいえばオナニーだよ。△ヤツタ!!ヤツタ!!△つてな。お前さんはつぎつぎに放火しては興奮している放火犯人と同じだ。まるで爆弾屋だ。おい、何の関係もない人達をきずつけて喜んでる爆弾屋、なんとか言えよ。くやしかつたら何とか言つてみろ!!ええ爆弾屋。おおかみ少年グループじやなく実はお前らこそ爆弾マニアじやなかつたのか?ええ、おい、何とか言つてみろ!!」かおを真赤にし、広げられたミット五号をバンバンたたきながらどなり続け

「検事検事つて氣安く呼ぶな。」

「検事でいいよ。公判にはおれは出ない。別の人が出る。都合で出るときもあるけどな。」

「これは写しだけれどもこのスギイ弁護士から届けられた選任届はお前さんのもんじやないのか。ここに特長のある字でかいてあるニイザトヨシミツというのをお前さんの名前か?・・・『警視庁七〇』といふのはもう解つた。このニイザトヨシミツがお前さんの名前かどうかを聞いてるんだ。・・・何度もいつたようにそれは留置番号で名前じやない。お前さんはニイザトだろ?」

黙つてるといふことは認めるといふことか。はつきりしてくれよ。このニイザトヨシミツと書かれた選任届はお前さんのものじやないのか?ないんだな。ヨシ以降弁護士とは接見できないからな。」

高橋「ヨコハマセーミツの人間はみんなお前についていかなくて良かつたと言つて。お前が爆弾犯人だと聞いてみんなびつくりしてゐるよ。会社テナヤンヤだよ。」

清水「この不景気に会社が爆弾犯人やつたことで社会的信用をおとし倒産でもしたら、お前はどうやつて責任とるんだよ。会社にめいわくかけてすまないと思わなうのか?」

高橋「ヨコハマセーミツから一人だつて差入れにきたか? 紅一点なんかぶつうだつたら来るぞ。」

岡田「弁護士ももうお前見限つてゐるんだよ。救対の差入れもお前がここにいる間だけだ。お前の為思つてるんじやなくただ義理で毎日差入れにきてるんだよ。みてみろ弁護士も面会に来んやないか。」

高橋「サトウやマエダは開示裁判やつてんだよ。おまえ拘留理由開示裁判つて知らんだろ。お前なんかもう弁護士にあきらめられてるんだよ。普通お前らの連中みんなやるんだよ。救対の弁護士だつてなにもお前らに

奉仕するために弁護士になつたんぢやない。あいつらも金と地位の為になつたんだ。他にもつと金になる仕事をいつぱいもつてるんだ。お前の事なんか考えてないんだよ。」

D 「ニイザト君、岡田君が、君が広中先生の『警備公安警察の研究』をよんでいるといふのできた。あんまり世話かけんなよ。今日は用があつて帰るけどな。』調室にいたのは二〇分位。「部長がきてくれた。』と岡田。

清水「この二人よく知つてゐるだろう。隊長のオザキと兵隊のタケヤだよ。お前らオスカーでいつしょにメン食つた仲なんだろう。この車もなつかしいだろ。この車で

隊長のオザキが運転して行つたんだよな。』「つくえに三枚の写真をならべる。

高橋「車のバック見覚えありますね。』

岡田「オザキはかしこそうな顔してるけどな。』

清水「オザキなんかはもうすぐ出てくるだろ。お前はドジだからこれからだ。オザキの入つてゐる前橋刑務所つて川つぶちにあつて冬はすぐくさむいところだよ。』

高橋「ニイザトお前この紙にヨウイクインマエの地図かいてみろよ。一生忘れられん場所だろ。知らないとは言つたか? どつちだよ? こんな事位返事したつてどう

返事できないんだよ。聞えてたら、わしが言つてる事解つたか? どつちだよ。』

清水「お前その『なにも言うことありません』といふのは、神奈川左派からの借りてきた言葉だ。お前にそう言えと言つた奴も、結局は自分が可愛いからだよ。Mか、Aがそう言えと言つたのか、どつちだよ。』Y知つてるだろ。あいつの女房医者だよな。』

岡田「ここで、なにも話すことがないといふのは、公判になつたら話すといふ事か。裁判官がそんなお前に時間さいてくれると思つてゐるのか。お前が公判で『裁判長、実はぼくの幼少の頃ですネー』って話そうとしても、その途端から『本件とはなんの関係もない。次いきなさい。』

清水「お前今まで公判廷行つたことないのか。そりや厳しいぞ。検事にドンドン追究されるからな奴は。わしら警察官の同僚は、みんな社会の為勇敢にわざわざ出させてやるから、ちゃんと想ひ出すんだよ。」

わせんぞ一四六年当時のことだから、もう忘れてしまつたのか。思ひ出させてやるから、ちゃんと想ひ出すんだよ。」半紙に地図を書き出す。

「ここが養育院で、ここが派出所だよ。道がこう通つてる。東上線がこう走つてて、ここが大山の駅だ。いいか、四十六年一〇月二十三日の夜、Oが仕掛けたあと、お前は一人でここから電車に乗つて帰つたんだよ。」

清水「OやTも一回は反省してたけど、又『ミット』なんかに投稿したりしてゐるから、お前が裁判の時頼めば否とは言わんだろう。」

岡田「神奈川左派だつたら、神奈川県警の派出所に仕掛けたらしいやないか。なんで警視庁の派出所に仕掛けるんだよ。」

高橋「この意氣地なしが。自分がやつた事にも責任とれないで。お前はそれでも男か!」

岡田「裁判で実刑くらうのがそんなに恐いのか。恐かつたら始めからやるなよ。」

「今のお前は、自供なんかなくたつて充分やつていけるんだよ。科学警察だからな。地檢の便所からは、足跡と掌紋が出てる。お前みたいな卑怯者調べたのは始めてだ。自分がやつた事になに一つ責任とろうとしないような奴は。わしら警察官の同僚は、みんな社会の為勇敢に

死んでるやないか。だから殉職といふ言葉もある。世の中厭になつたら、山にでも行つて自分一人で爆弾抱いて死ぬんだよ。』

「お前つんばか? 聞いてるのか? な、返事しろよ、聞えてるのか? 一よい聞えてるんだな。こんな聞えてるかどうか位直ぐ返事しろよ。何回同じ事言わせるんだよ。』『聞えてるのか?』『はい、聞えます。』なんで直ぐ返事できないんだよ。聞えてたら、わしが言つてる事解つたか? どつちだよ? こんな事位返事したつてどう

つてことないやろ。調書取つてる訳やない。返事しろよ。』

清水「お前その『なにも言うことありません』といふのは、神奈川左派からの借りてきた言葉だ。お前にそう言えと言つた奴も、結局は自分が可愛いからだよ。Mか、Aがそう言えと言つたのか、どつちだよ。』Y知つてるだろ。あいつの女房医者だよな。』

岡田「ここで、なにも話すことがないといふのは、公判になつたら話すといふ事か。裁判官がそんなお前に時間さいてくれると思つてゐるのか。お前が公判で『裁判長、実はぼくの幼少の頃ですネー』って話そうとしても、その途端から『本件とはなんの関係もない。次いきなさい。』

甘くないぞ。」

「弁護士がなにも話すなって言つたのか？　その内、心証悪くなるから、もうそろそろ諜れと言つてくるに決つてる。そしたら話すのか？」

清水「家主から言つてきた卵の件にしたつてそうだ。あん々こと位自分で判断しろよ。お前が勾留尋問終つてから返事するつて言つたのも、その時地裁で弁護士に逢えるからだつたんだろう。家主が本部にこう言つてきてるららしきつてな。卵をどうするか位までいちいち弁護士と相談せんと判断つかんのか。お前はロボットだよ。」

高橋「時計ばかり見やがつて。腕時計見えない様に隠した方がいいですよ。今日はどうせ朝まで調べるんだから。時間なんて気にしなくていいんだよ。寝させないからな。」

岡田「お前がなんの反省もなく、一言も諜りませんつてお袋に電話してやろか。そしたらお袋病氣のところ又以上にバッタンだ。それでもいいのか。今のお前のいる前で電話して、お袋に成仏してもらつてもいいんやぞ。これはわしの知つた事じやないからな。取調べのことをそのまま伝えるだけだ。今のお袋にはそれで充分だよ。」

高橋「ニイザト、これ。』K君はお元気ですか』だつて。これ一体誰れに当てた手紙だよ。木、教えてくれよ。」

橋は手紙の下書きを押収し、それを解読したのだといふ、コピーされたものを手にしている。

岡田「お前あれだな、わしら政治警察のこと『奴ら』って言うんだな。」

高橋「兄貴の嫁さん、Mさん引っぱつて来うか。』あなたはぼくにとつてアキレス腱です』のMさんを。」

岡田「片道切符、かつこして逮捕状のことと書いてあるけれども、』片道切符が出てから』という事は、自分に逮捕状が出てたのを知つてたという事だな。それに』生活の中から生まれた関係』だなんて、お前は総評議長みたいな文章書くんだな。」

高橋「兄貴の嫁さんに手紙を書いたり、Bと一緒にアパートにいる時には、隣りの若い女に』あなたの裸を想像します』なんて生意気なこと言つて、アパート出るはめになつたりして。お前どこまでドジなんだよ。Mさん、女四十歳放題つていうからな。」

清水「不動産屋の姉ちやんには、離婚したので荷物が少いといい、会社では妻や子供がいるつて扶養手当だまし取つて。妻が家で内職をしているので残業はできませんと早く帰つてな。」

岡田「遅いから車で行つてくれよ。金渡すから。」

清水「いや、いいですよ。昨日貰つたのがまだありますから。」

毎夜八、九時頃になると、清水は自分の作成した調書を黒い合成皮革の手さげ袋に入れて調室を出ていった。

高橋「お前の妻や子はどこにいるんだよ。第一お前みたいな薄汚れた、頭のはげた奴にくつ付くような女はないよ。お前なんか共同便所すら抱かせてもらえなかつたんだろ。ゴミだからな。そういう時には手合わせて頼むんだよ。会社の社長も社長だ。もつとも小さな会社だったから、人が来なかつたんだろうけどな。」

岡田「新しいメンバーも結集し、従来の狭い枠を取り払つてきつつあります、と書いてあるけれど、この新しいメンバーというのはSやMの事か？」

高橋「』もしかなとの緊張関係を保つてくることがなかつたとすれば、今のぼくはあり得なかつたでしょう。』このあなたとの緊張関係』つて一体なんだよ。あ教えてくれよ、ニイザトさん。緊張関係だつて。お前この『K君はお元気ですか』のMさんとどんな関係だよ。お前やつたのか。ぼくにとつてはアキレス腱のM姉さんとオマソコやつたのか。こりや大変だ。この事お前の家に知らせたら、も一つ又ひっくり返えるよ。』この事平凡パンチかなにかに連絡すれば面白いですよ。きつと飛びついて来ますよ。』

『奴らは唯一あなたの事をダシにして、ぼくを転ばせ

(注) 警察官らは新里氏の姉への手紙を兄嫁へのそれと勘違いすることによつて、彼らの言うところの『ハレンチ行為』をなしてゐたに違ひないと勝手に妄想したのである。

## 4. 5月23日→6月1日

5月23日 弁護士接見  
5月28日 弁護士接見

5月29日 弁護士接見

6月1日 定期診断、起訴通知、29号調室へ移動

清水「座るな！この野郎立つてろ！」調室に連行されてくるなり、壁ぎわに追いつめられる。

「おい、お前弁護士に拷問受けてますって言つたんだつてな！なにが拷問だよ！なにが椅子の上に正座させられますじや！正座というのはな、地べたに座ることを言うんじや。それに、白い紙を張りつけた壁に向つて、じつと見続けさせられてるとも言つたそらだな。おい、これよく見ろよ！お前これが見えんのか！ただの白い紙じやないだろ。紙に字書いてあるだろが！」これが見えんのか、エ！精神的拷問を受けますだつて。なにが精神的拷問だよ。精神的拷問どうやつて受けたか説明してもらおうやないか！弁護士が抗議してきてるんだよ。精神的拷問つてなんじや！お前がなにも考えようとせんから考えやすいようにさせてるんじやないか。この責任は絶対とらすからな。—ホラ、弁護士に言つ

高橋「くそ、拷問があつたらいいのにな。こんな薄汚ない、ゴミみたいな奴ぶん殴つてやるのに。一辺に吐かしてやるよ。今お前を殴つたら首になるからな。」

清水「ふざけやがつて。ずっと立つとれ。この野郎、休めするんじやないよ！」

上司？から電話に「いえ、いつもは八時半に出てきます。ええ、今日はちょっと遅く。主任は休みです。

用事があるとか言つてました。」と高橋。「明日からは、ヤツコさんにもたまには早く出でもらいましょよ。」清水と高橋はいつも運動の始まる前、ないしは運動の最中に調室へ連行しにきた。その時には岡田はまだ調室に出てきておらず、だいたい十時半から十一時頃出てきた。

高橋「刑務所行つたら、お前なんかジャリだ。人殺してきてような奴がゴロゴロしてるからな。お前なんか毎日便所掃除だよ。そんで夜になつたら、『汚ないけどまあいい』

や。穴かせ』つてカマほられてな。公判始まつたら聞きに行くからな。判決が出たら俺拍手してお前を刑務所送つてやるよ。出てきても、どうせ又なにかやるだろから、直ぐ逮捕して逆戻りだ。」

「川崎にはトルコ風呂多いやろ。あそこのストリップ行つたことあるか？川崎あたりの労務者もあそちらへんのトルコ行くんじや。焼鳥屋なんか、金なくなつた奴がみんな行くんじや。お前トルコに行つたことあるか。始めは風呂に入つてな、上つてからオマンコに石鹼つけて、泡たてて体に押しつけて洗つてくれるのが泡踊りだよ。つぼ洗いというのを知つてるか。オマンコにキンタマ突込んで、女が腰クネクネ動かすんだよ。若い奴なんかそこで一発終りだ。あとベットで念入りにマッサージしてから又本番だよ。川崎の労務者連中だつてみんな行つてるんだよ。なにが川崎のプロレタリアートじや。なにがプロレタリア革命じや。お前はドジだからなにも知らんのじや。—俺が知つてゐる日大芸闘委の女なんか、二回、三回と中絶手術受けでな。何が革命の為じや。男とオマンコやりたいだけじやないか。お前らの同志とか称する女も皆共同便所だ。あつち行つてはやり、こつち行つてはやり。男だつたら誰でもいいんじや。革命なんか誰も本氣で考えてないんだよ。お前はそんな事も解らん

で、仲間のことと共同便所言われて悔し泣きなんかして。いっぱいの革命家振るんじやないよ。Sのドバカは、朝寝てるところ逮捕状見せられて、目の前が真暗になり、それで直ぐ青酸カリ飲んだんだ。ダイドオジアヤコだつて、隙をみて口に放り込もうとしたけど、手払られたもん死ねなかつた。女だつてお前らより立派だよ。」

「お前なんか刑務所出てきても雇つてくれない。もしこかもぐり込んで、俺達が直ぐ会社に電話してやるよ。『実はニイザトは—』つて。そしたら即刻百だ。お前なんか親父と一緒にバタ屋、くずやお払いやればいいんだよ。多摩川の河原で。お前みたいなゴミは、出てきたらバタ屋の親父に捨ててもらうんだよ。」

「馬鹿か。押収してこなくともみんな記録にとつてくるんだよ。写真とつたり。」清水と「？」に付いて話していた時、こちらが「押収品目録に『？』はのつてなかつた。」と言つたことに對して。

「神奈川左派なんてゴミみたいな奴の集まりで、十人そそこそこんだろ。もう終りだ。俺がきつとつぶしてやる。」十年の刑が恐くなつたのか？—オ、いいぞ、その調子だよ。最後までそうやつて頑張るんだぞ。」

清水「お前は一番汚い詐偽師やないか。他人の名前かたつては、会社から扶養手当だまし取つてな。他の人は皆んな残

たことは間違つてましたと書け。ホラ、書くんだよ！」

検事が接見指定書を発行しない中で、弁護士は連日監視庁玄関へ、『70番』への接見を求めてきていた。五月二十三日(日)に接見指定書を

持たなくとも『70番』に接見できるようになり、午前九時頃接見。この日、清水と高橋が連行すべく留置場受付にきたのは十二時過ぎであつた。

清水「くそ、拷問があつたらいいのにな。こんな薄汚ない、

ゴミみたいな奴ぶん殴つてやるのに。一辺に吐かしてやるよ。今お前を殴つたら首になるからな。」

清水「ふざけやがつて。ずっと立つとれ。この野郎、休めするんじやないよ！」

業してゐるのに、自分一人だけせんで。だました金で川崎

あたりウロウロしやがつて。何がパートの小母さん達が怪我するじや。全く聞いて呆れるよ。この詐偽師が。おい詐偽師、悔やしいか。お前なんか口ボットだからなにも言えんだろ。」

高橋

「パートの小母さんがどうのこうのつて、お前が気配ることないんだよ。女工は女工で充分だ。怪我したつて構わないんだよ。あいつら女工しかやつていく能ないんだから。女工は女工なんだよ。お前なんかどうせなにも出来ないんだから、大人しくステレオの摘みでも磨いてたらよかつたんだよ。組合とか、女工とか言うことないんだよ。」

岡田

「この間わしが涙浮かべてたのを知つてた。自分のお袋を思い出してな。わしは別にお前みたいに親不幸した訳やない。でもお袋なんて末っ子が一番可愛いんだよ。わしも末っ子だからな。わしは仕事でとうとう死目に逢えんかったけど、お袋は最後までわしの名前呼んだと言つてた。葬式のときわしは寝てるお袋抱き起こしたぞ。どうかして生き返らせようとしてな。わしは振り動かしてたぞ。お前はお袋の、『ヨシミツよ、早く自白しておくれ』って差し延べた手を振り払つてな。本当に薄情な奴だ。血も涙もない。お袋は病氣なんやぞ。死ぬか解らん

のやぞ。」

高橋「お前がこうなつたのもお袋達の責任だ。二人とも七十五や八十年まで生きてることないんだよ。」

清水「こいつが、働いてる皆んなの事を思つて泣いたのは、みんな嘘つぱちですよ。」

高橋「お前、今日で逮捕されてから何日目か知つてるか?」

「そうだよ。いつも、あと何日だなつて数えてるのか。」

清水「疲れた? 疲れるようにしてるのはお前自身やないか。

名前もなにも言わないからだよ。体の節々が痛くなつて

きたやろ。早く房に帰つて休みたいだらう。だつたらち

よつとでも早く話して、自分自身樂になることだよ。」

高橋「お前は全国的に有名なニイザトなんだろ。そちらへん

の内ゲバなんかで引つぱられてきたジャリジやないんだろ。だつたら、もつとシャンとしてろよ。」

「今までみたいに、警視庁70じや差入れ受付けないからな。70というのは留置番号で、名前じやないからな。お前がいなくなれば又誰かが70になるんだ。救対の奴も二

イザトヨシミツに差入れにきて、警視庁70にじやないからな。」(注)救対はあくまで留置番号で差入れをした。

警察官三人の内二人は調査を出ていき、それぞれ一時間おきに交代する。

高橋「思い出したか! 一まだ思い出さないのか。よし、続

岡田「お前同房の人間に、黙秘でいけて説得してるんだつてな。」

清水「お前同房の人間に、黙秘でいけて説得してるんだつてな。」

高橋「お前同房の人間に、黙秘でいけて説得してるんだつてな。」

けてそれ見て考へてろ。下向くんじやないぞ。俺はなに

もしてないんじやないぞ。取調べて質問發してんだけらな。後ろ、背中つけてないだろな。」机には『君の名

前はニイザトヨシミツです』と書かれた半紙が置かれてる。

弁護士による抗議があつてからは、時々供述調書を引つぱり出し、ペンを持つて『名前、本籍は?』と調書を取る仕草を繰返えす。

「お前なんか調べてるから、全然勉強できないよ。」高橋は背広ポケットから法令集を出して読んでる。そして、こちらが少しでも体を動かすと

「何か言う事あるか!」とヒステリックに怒鳴るのである。

「背中つけるなよ。ホラ、もつと前に出ろよ。一なに!!『自分は出来るのか』だつて。俺だつて自分の信念からだつたら出来るよ。ホラ、背中つけるなよ。この野郎、ホラ』幾度も押合いをやつてゐる内、椅子に背をつけても文句を言わなくなり、たまに思い出したように押戻していく。

岡田「おひなにか書いたのか? 『君の名前はニイザトヨシミツです』なんじやこれ。お前自分で書いたのと違うのか」

「ほら、又欠伸かみ殺して。もつと顔上げとけよ。さつきは二回もコックリこぎやがつて。」岡田達は一切話しかけてこない。時々机を強く叩き、こちらの眠む気を覚まそうとする。

清水「お前同房の人間に、黙秘でいけて説得してるんだつてな。」

岡田「この野郎、悪い奴だな。」

清水「立て! どういうつもりなんだよ。お前と一緒にいるシンナーの兄ちゃんが、お前に言われたからつて一週間位黙秘できただけど、もう早く帰りたいので、みんな話をますつて調べに言つてるんだよ。お前捜査に仕障きたした責任どうどるんだよ。エエ! おひ! 一独房に移さなければ駄目ですね。」

高橋「お前、留置所で同房の奴らに、自分がなにして入つてるか言いきらんだろ? 爆弾やつたなんて言つてみろ、一边にお前なんかつま弾きだよ。皆んな隅っこに逃げちやうよ。もしお前が緑莊みたいになつたら、さまあみやがれつて、俺小便ひつかけて、お前のバラバラに千切れた肉にくそしてやる。」岡田と清水は笑いこける。特に岡田はそれが余りにひどいため、息を詰まらせ涙を出す。「ニイザトの差入れですがね、どういう名前できます。ある、そうですか、ええ直ぐ行きます。」と電話を取つ

た高橋。

高橋 「行つて下さいよ。俺まずいんですよ。昨日あの野郎とやつちやつて。」差し入れを受取りに行くのは主に清水である。

「差入れ喰い残したら捨てるからな。一辺にみんな喰えよ」

「解らん奴だな。留置人規則読んで聞かせただろ。お前が『差入れはみんな受けます。』と言つても受けられないとだよ。言つただろ、差入れは留置場の看守と調べ官が相談して、受けていいかどうか決めるんだって。今までの差入れはみんな主任の好意で受けてやつてるんだよ。わざわざ玄関まで受取りに行つてな。これから暑くなるし、握り飯やおかずは駄目だ。突返すからな。なにか喰いたい時は自弁取ればいいんだよ。金持つてるんだから。解つたな。どうなんだよ、返事しろ。聞えてるのかー」

聞えてるんなら返事しろ。この野郎、『差入れはみんな受けます』じやないんだよ!! 明日から受けないからな。毒でも入れられたら、こつちが責任とらなきやならないんだよ。』

「早いけど、お前飯喰うかーこの野郎、飯喰う時と小便の時だけ直ぐ返事しやがつて。ホラ、喰え。」差入れの紙袋を放り投げる。

て有利な点だけでも話して、調書にしつくんだよ。裁判始まる前に、裁判官は前もつてみんな読むんだよ。お前はあと法廷で、ここで言い忘れた事や、補足説明すればいいんだよ。その為に勾留付いてるんだからな。ここで調書にしていかなかつたら、裁判官も、『なぜ二十日間も勾留が付いてるのに話さなかつたのか。今さら忙しいのに聞いておれない』と言うに決つてる。』

高橋 「お前裁判では、救対の連中が来てるもんだからどうせイキがつて謀りまくるうと思つてるんだろ。そんで判決下つたら救対の連中と一緒に、思想裁判だとなんかんとかゴネるんだろ。お前がなに諜るかはもう解つてゐるよ。その時になつて吃るなよ。ボ、ボクッつてな。公判で吃つてみろ、裁判官に『なに言つてるんだこの馬鹿、次!』と言われて終りだよ。』

「Oなんか最高裁までいつて却下されて、おまけに訴訟費用なんかみんな自分持ちだよ。お前貯金してあるのか。弁護士や訴訟費用の支払いどうするんだよ。—Oもいざ刑務所行くとなつたら恐くなつて救対の弁護士解任して自分で弁護士付けたけど、こいつも駄目だつていうので又救対の弁護士選任しなおしたりしてな。Tだつてそうだよ。裁判始まると矢張り刑務所行くの恐いもんだから、裸になつて便器にしがみついて出廷拒否なんかしょつて。」

清水 「明日からは自分でこれ付けていけよ。差入何々受けま

したつてな。俺が書いてきた通りでいいから。」明日日より、こちらが差入れ受領台帳を書いていく。夕食は必ず四時二十分に留置場より支給されるが、五月二十六日たあと五時過ぎに新らためて岡田達が調べ室へ持つてきた。

高橋 「早く喰つて又考えるんだぞ。俺らは今お前を取調べてるんだからな。」

清水 「あと五分しかないぞ。はよ喰つてしまえよ。」

「三十分たつた。ちゃんと前向いて。そうやつて姿勢崩すなよ。」

高橋 「裁判所には救対の連中が来るやろ。神奈川左派の奴は一人も来ないよな。来たらすぐ逮捕してやる。その内救対の奴らも、ゴミみたいなお前の陳述に呆れかえつて途中からみんな帰つてしまふよ。」

高橋 「裁判で事實を明らかにする位なら、今ここで言つても同じ事だろ。裁判はお前だけやないし、裁判官にしても、

岡田 「お前裁判所で陳述すると言つてるけど、裁判所でやって、なんでここで話せんのじや。なにか、裁判所は国家権力やないいうのか。」

清水 「あと五分しかないぞ。はよ喰つてしまえよ。」

岡田 「お前裁判所で陳述すると言つてるけど、裁判所でやって、なんでここで話せんのじや。なにか、裁判所は国家権力やないいうのか。」

高橋 「裁判で事實を明らかにする位なら、今ここで言つても同じ事だろ。裁判はお前だけやないし、裁判官にしても、お前の話しばっかり聞いてはくれんぞ。ここで自分にと

お前らの仲間みんな根性ないよ。」

「お前がどう思おうと、弁護士はOやTを引っぱり出してくるよ。みとつてみろ。」

岡田 「どうせ裁判で陳述するんだつたら、どや、別にわしらにのうても、裁判官に意見書作つたらどうや。」

高橋 「お前のその『何も言つことはない』はもう聞きあきたよ。他に変つたこと言えんのか。」

清水 「なにも自分がどう思おうと、弁護士はOやTを引っぱり出しえない。もともとお前には革命理論なんてないんだよ。お

前のアパートにあつた本はみんな飾りだろ。ただAやMに、あつち行け、こつち行けとき使われてただけなんだよな。三十三にもなつて。Mなんかお前と同じ年やろ。悔しいとは思わんのか。このことに矛盾は感じんのか、エエ。」

高橋 「こいつこの間俺に『一つだけ聞いていいですか。年は幾つですか?』だつて。ナメるんじやないよ。この野郎。お前みたいなゴミに年聞かれる筋合いないよ。黙秘だつたら黙秘で、これからは絶対になにも諜るなよ。お前の信念なんだからな。」

岡田 「お前が黙しても、この事はみんな調書になつて、裁判官のところへ行くんだからな。」

清水 「今日俺、子供の誕生日だ。俺の帰りを待つてるけど、裁

お前みたいな奴相手にしたためいつまでも帰れないよ。」

岡田「今夜から留置場に帰らんとここで宿るか。毛布は8枚か持つてやるよ。そのとこ手錠つないで。わしらは帰るから。房に帰つたらつまらん話しばっかりして考える事なんか出来んやろ。ここだつたら一人でじつくり考えられる。どや、そうするか。この方が静かでいいやろ。—『いや、帰る』つて、お前どこに帰るんだよ。ここも警視庁の内に変りないんだよ。別に留置場に帰つて寝かさんでも、お前にについてはわしの責任でどうにでもできるんだよ。」

高橋「こんな奴相手に体でも壊すといけないから、そつちは適当にやつてればいいって（？）が言つてましたよ。」

清水「おい、寒いから勝手にゴソゴソ服着るなよ。今取調べ中なんだぞ。何度も言つて聞かせてるだろ。お前取調べられる人、俺たち取調べる人つて。お前悪い人、俺い人。立場というものがあるんだよ。立場というものが。上衣を着る時にはちゃんと断るんだよ。着てもいいですかつて。立場があるつて何度言つたら解るんだよ。」

高橋「名前はなんですか!! 四十六年十月二十三日夜、どこにいましたか!! くそ、この野郎、お前はつんぽか!! おい!!」耳元や、顔の十センチ程手前で怒鳴り続ける。つばが顔中にかかる。

「『疲れたから房に帰して下さい』だと? ふざけるんじやないよ。お前は勝手に自分で黙つて疲れてるんだろ。

狼グループのササキなんかいつもシャンと胸を張つて、疲れたなんて一言も言わなかつたぞ。あいつなんか四回位再逮捕されたけど、最後まで疲れたなんて言わなかつた。あいつも始めはみんな諜つてしまつたけどな、兄貴のササキショウジに怒られてからははずつと黙秘で通した。

お前なんかよりずっと立派だよ。それに勾留は、お前を房で休ませておくんじやなく、取調べのために付いてるんだからな。今日はとにかく、名前と生年月日だけでも思い出せ。それが思い出せるまで、十二時過ぎても房に帰さないからな。」

高橋「お前はニイザトか!! 四十六年十月二十三日夜、どこにいましたか!! くそ——ウヘー臭さ。お前歯磨いたのか。俺帰つてがあちやんとチユしなきやならないんだよ。

清水「弁護士から『疲れたと言え』と言われたのか。医者に診てもらうか。」

高橋「お前はニイザトか!! 四十六年十月二十三日夜、どこにいましたか!! くそ——ウヘー臭さ。お前歯磨いたのか。俺帰つてがあちやんとチユしなきやならないんだよ。こんな奴に怒鳴るのもう止めだ。臭いよ。こいつの目、白いとこみんな濁つちやつて、本当に汚い目してるよ。」

「くそしたい? 今朝やつてこなかつたのか。朝出なかつたら一時間位便器に座つてるんだよ。この野郎するい

から、わざと調べの時トイレへ行くんですよ、きっと。」

出もしないのに。気分転換のために行くんですよ。ホラ、こい!! 全くうす汚い考えもつてるんだから。」

岡田「おい、お前この間から食べる変な菓子パン、あれお袋からの差入れだつたのか。」岡田は弁護士を介して入手した。警視庁七〇当ての手紙を手にしている。

「どうか体だけは壊さない様に、差入れはみんなもりもり食べて、ドンシリと構えていて下さい。」おい、お前とこ、姉さんも一諸になつて爆弾やつてたのか。皆んな、何かあなたにして上の事はないかと残念がつています。結局、何にも知らない私達家族があれこれ心配するよりも、この場は救援センターの弁護士さんにお任せしようと皆んなが納得しました。」か。弁護士よりもわたしの方が詳しいし、頼れると思うんだけどな。」

高橋「とにかく連絡して、一度ガサ入れる必要ありますね。岡田「両親とも元気です。面会できる様になれば、直ぐにでも逢いに行くと言つてくれています。今日はお母さんのつくつた砂糖テンプラをあなたに差入れてもらおうと、救援センターに持つてきました。」ここではお袋さん元気だつて書いてあるけど、わしが言つたことは嘘と違うぞ。」

手紙は弁護士によつて、翌日回収された。

検事「なんだ、とうとう筆談か。」調室に入つて来、机の『

君の名前はニイザイヨシミツです」と書かれた半紙を見て。

「罪を反省して早く出たいと願つている被疑者に、お前さんに黙秘しろと言われたのを守つて、反省の色なしと刑くらつたりしたら、そいつにどうやつて責任とるんだよ。思ひ上つたことするんじやないよ、バカタレが。俺は留置場にいる間も決して無駄には過ごさなかつた。同房の人に完黙でいくべきだと説得したつてな。」

「差入れのアンチャンふさけた名前を使いやがつて。一字違ひのオオタタカシだなんて。あいつの本名は解つてるんだ。」

「たかだか飯をおごつてもらつたり、電車の切符を買つてもらつたりした位でな。」検事高橋が手にした書類に『その日は勤務が昼までだつたので、一諸に食をしー』と書かれているのが見える。

「オオバヤシのオルグの失敗。労働運動の失敗。留置場にまで来て、暴力団のアンチャンに黙秘でいけと言つてそれをタレ込まれたり。お前さんがやつてきたことでなに一ついい事ないやないか。酒を飲みながら『俺は犯罪者が好きだ。犯罪は結果ではなくその過程が問題だ。』と言つてみたり。お前さんの言いそな事だよ。お前さんは、オオクボキヨシまで理解できると言つたんだつて

な。なんぼお前さんがそんな事言つてないと言つても、オオバヤシの調書には現実にそう書いてある。不用意な事言つてな。酔つ払つてゐるから、自分がなに言つたのかも解らないんだろ。一度なんかグレンゲレンになつて帰つたことがあると大家も言つてる。」

「お前さんのところから押収してきた品物見せてもらつたか？——お前さんが裁判で無罪を主張するといふので、ひよつとしたらわれわれの中になにか大きな穴を発見したのかと思つて、昨夜は資料をもう一度逆昇つて検討してみた。しかしそんなものはどこにもなかつたな。落度はなかつた。お前さんが無罪だと言つてるのは強がりに過ぎん。ただ、それでもお前さんが無罪を主張するとすれば、次の三つがあるな。その第一は政治的無罪というやつだ。『俺はこの裁判制度自体認めてない。だから俺は有罪であるけれども無罪なんだ。』といふやつだ。こんな馬鹿氣な考へは持つなよ。第二の無罪だといふ主張は、お前さんの考へる革命が明日にでも起つて、仲間が裁判官になり無罪を宣告することだ。しかし当分革命なんか起りそうもないからこれも駄目だ。もう一つはデッチ上げ裁判をやり、四十六年十月二十三日当時、日本にいなくて外国に行つてましたと主張することだ。それでなくとも誰かに、あの夜は確かに一諸に酒を飲んでま

したとデッチ上げてもらうことだよ。しかしこんなものは直ぐバケの皮が剥がれる。これも諦めろ。あと無罪を主張する根拠でなにが残されるんだよ。なにも無いやないか。ここまできてまだ無罪を主張するとしたら氣違いか、一人よがりの強がりだけだ。〇やTを公判に引つぱり出して、自分が言つたニイザトといふのはこの人ではありませんと言わせるのか。お前さん一人の為に偽証罪を背負わせ、〇にもう一度刑を重ねたいのか——今となつては、お前さんが無罪を主張する根拠はどこにも無い。無罪はデッチ上げの裁判をやることだ。おい！お前養育院前の爆弾やつただろ！ 爆弾だよ！ 爆弾やつただろ！！

「なにが思想裁判じゃ。今までにはみんな、爆弾をやつたといふ実行行為を裁いてるんじやないか。あまりふざけた事言つたなよ——なんだ、なににらんでるんだよ。にらめつこか、よし、目逸らすなよ。——目を逸らすんじやない。こっちを見る。おい！ おい！ にらまれて怯むと思つてゐるのか。」

「東京へ出てきてから、なんでお前さんは急に一兵卒になつたんだよ。」

「〇が爆弾を置いたのはこの印のあるところだ。ここで一度ひつくり返えしたけど、又立て直したんだよ。お前

さんはこの道を渡り、ここを入つて行つた。ホラ、見てみろ——そんなんに見詰めることないだろ。お前さんにとつては見覚えある場所なんだから。」手前に押しやられた公判記録を急にひつたくる。張りつけられた写真には赤インクで矢印が書き込まれてある。

「お前さんは酒が好きだから、Tと酔つたまねをして先を歩いて様子をうかがつたのがこの場所だ。そしてお前さんはここを行つた。俺も以前この近くに住んでいたので、この付近はよく知つてゐる。どうだ、見覚えがあるので！ おい！」公判記録をバンバン叩きながら怒鳴り続ける。

「お前さんあのあと、大山駅からどこへ行つたんだ？」

「なんだ、腹式呼吸をやつてるのか。」

「裁判で、あれは爆弾ではありませんなんて主張するなよ。間違つても自分のかつての同志や組織を辱しめるようなまねはするなよ。當時組織の全力をかけた闘争をな。もつとも最高裁にまで、あれが爆弾だと認められるんだから、もうどうしようもないけどな。」

「真実といふのは一つしか無いんだよ。お前さんがやつたという真実しか。毛沢東が相対的真実と絶対的真実について書いてる。読んだことはないのか？」

「真実に付いての講議が三十分位続く。」

「明日マエダのお袋さんが、マエダのところに逢いに来るとか言つてたな。——お前さん芥川の『杜子春』を読んだことあるか？ 近頃の小学校の学芸会は以前と違つて、クラス全員が劇に出ることになつてゐる。何人の生徒が立替り杜子春の役を演じてな。」三十分位かかる『杜子春』のあらましを話す。

「お前さんは鞭打たれ血だらけになつてゐるお母さんを捨ててまで、仙人、革命家になりたいといふんだな。」

岡田「おい、ニイザト。ちょっとこつち見てみ。ニイザト。おい、お前なーこの野郎、ニイザト言われた時はこつち向きやがらんと。まあいい。お前北海道行つたことあるのか？」

高橋「な、ニイザトしやん、なんでもいいから諷つてくれよ。頼むよ。たまには早く帰つて一杯飲みたいんだよ。女房の奴ナメコ汁つくつて待つてゐるんだ。早く帰らせてくれよ、な、ニイザトしやん。お前は調べ終つて直ぐ寝れるけど、こつちはそれから電車で一時間かかるんだよ。風呂だつて入らなきやだめだし、いつも十二時、一時だよ。うつとこんな狭い、日も照らんような所でお前に付き合わされて、俺頭へんになつてきたよ。」

清水「始めお前から石鹼箱買わないと聞いた時、女房の化粧石鹼の箱が家にゴロゴロしてて子供がおもちゃにしてる

から、お前に一つ持ってきてやろうと思つてた。俺は本

当にお前の面倒みようと思つてたんだよ。でもお前はいくらこつちが話しかけても、人の好意を裏切つてな。俺

もひげが濃いから、せつかく電気かみそり借してやると言つた時もそうだ。お前は人間としての関係すら信用しないんだからな。」

高橋「こんなうすら馬鹿相手に怒鳴つてきて、俺はもう疲れたよ。」

岡田「こいつに見覚えあるだろ。お前のところから持つてきやつた。こんな計り横浜精密とどんな関係あるんじや。仕事でこれ使うのか。これどうやって使うんだ、教えてくれよ。上皿は今無いけどな。鑑識で調べてる。付いてた粉も、もう結果が出る頃やろ。どうやるんだよ。早く使い方教えろよ。こうか。」手首をつかんで、押収してきたといふ計量器に触わらせようとする。

「こんなもの、いつ迄も大事に持つてないで、川にでもさしさと捨ててしまうんだよ。お前はドジだな。一あのお皿に付いてた薬はなんだよ。さてはお前北海道庁もやつたのか。五件の他にもっと爆弾やつたのか。それが恐いから、それで今迄なにも諜れなかつたのか。そうか？」

高橋「ニイザト、お前あの消火器に何に入れただ。便所に

流したんだろ。だから水洗便所のあるところ借りたんだ

ろ。」

岡田「あれいつ頃買つたんだ?」

「お前、次から調べ官代つた方がいいか?」

高橋「今度くる人は刑事あがりで体だつてでかいし、お前な

んかふつ飛ばされちゃうからな。」

岡田「わしみたいな優しい奴では駄目やろ。どや、わしの調

べの方が多いか?」

「〇は調書で、山行きはお前から誘われたと言つてるぞ。

山へは実は何しに行つたんだ。一お前とこにサンド

ペーパーもあつたけど、あれでお前削つたんだ?」

高橋「あれでこいつのはげ頭磨いたらよく光るだろうな。」

岡田「お前、〇とT恨んでるんか。俺の名前出しやがつてつて。それは違うぞ。お前の仲間はみんな有り難たいなあ。ニイザトも早く改心させなきやいかんというので、お前の名前出したんだからな。感謝しなきやだめだぞ。本当にいい同志やな。」

「道案内したり、人が寝てる時に街を守つての派出所な

んかに仕掛けんと、どうせやるんだつたらわしらにやるんだよ。公安の人間に。なんでいつも関係のないお巡りに仕掛けるんだよ。何か、お前は、警察が労働者の敵だ

から、それで憎いから派出所に爆弾仕掛けたのか。そうか?」

訴された時点から、永い年月が始まるんだぞ。」

高橋「明日からも調べ出てこいやな。調べ出てきたら差入れ受けてやるから。留置場になんかおるより、ここに出てきた方がいいやろ。」

六月一日夜六時頃、調べ室を一九号室へ移動する。

留置場看守「七〇番。起訴の通知があつたからな。起訴状はあとからだ。」六月一日夜八時、消燈まもない頃。

「わしは裁判なんかどうでもいいんじや。とにかくわれわれ警察官と、ここにいる検事さんに対してどう責任とするのかはつきりさせてもらおうじゃないか!」検事高橋が調べ室にいる。

「お前は別に裁判所に爆弾しかけたのと違うのじや!」

わしは警視庁の派出所と検察庁にしかけられたことを言つてゐるんじや! この責任どう取つてくれるんじや、エエ、おい! わしらと検事さんに責任とつてもらおうやないか!! 腰に手をやり、怒鳴り続ける。

「普通だつたらとんでもない重刑なのに、革命だとかなんとか思想的背景があるといふだけで、こいつらの刑は軽くなるんだ。俺はこいつらにこそ目一杯の求刑を検事さんに打つてもらいたいよ。思想裁判といふのはこつちが言いたいよ。」

「お前M姉さんが死んだら、きっとお前も刑務所の房で首吊つて死んでやるんだぞ。それがお前にできるただ一つの償いだ。解つたな。」

岡田「今日で勾留最後だけだ。どや、名前だけでも簡単な調書つくるか? 一本当にお前自分が黙してたから、起訴ならんと思ってるのか。お前の起訴は九九、九九九%間違いない。わしが保証してやるよ。永年この仕事やつてきてる関係から、わしの言うことはほぼ当るんだ。起

5. 6月2日→6月10日

6月2日 弁護士接見

6月3日 京都府警調べ。弁護士接見。

6月4日 弁護士接見。起訴状入手。

6月7日 弁護士接見。

6月10日 東京拘置所へ移管。

6・2

岡田 「どうや、起訴された感じは。わしが言つてた通りになつたやろ。始めから観念してたか。昨日何時頃聞いたんだよ。寝てからか?」

高橋 「ニイザト、この部屋覚えてるか? 始め指紋とつたとこだよ。」

岡田 「昨日夜、なぜここに部屋かわつたか解らんだろ。サトウが来てたんだよ。警察署出たところで再逮捕だ。サトウのやつ"調べはあんたの方がいいな"言つてたぞ。留置するところは別だけど、わしが全体の責任者だからな。Mのお袋さん気狂つたんだって。」

「もう起訴されたんだから、名前ぐらいは認める気ないか? 別にどおつことないやろ。一今まで黙秘で通し

たんだから、今さら諜ることできんか。」

高橋 「始めお前見た時、すごい奴が来たなって思つたけどな。光らしてにらみつけてな。ニイザト、俺実をいうと恐かつたよ。」

清水 「明日ドライブに行こか。板橋の方。一ドライブで行かないのか。」

6・3

岡田 「ホラ、偉い人が二人来てくれた。」

E 「今から京都の件について調べとるけどなー五九一の一三〇一か。まあこれはあとから電話してもらえ。俺マサハルな、あいつよう知つとんネ。覚えるやろ。赤軍派と、当時君ら戦旗派と言うとつたもんの内ゲバ。いつたん御所に皆んな集まつてな。」 Eは、半紙に鉛筆で質問事項がこまかく列記されたものを棒読みしていく。

「まだ一杯聞きたいことあんねけど、これからも矢張り黙して語らずか? 一署名、指印せんか?」

「今日はこれで帰るけどな、話す気なつたらいつでも知らせてくれや、じき来るから。」

Eの調べは一時間位で終る。

岡田 「京都とわしとどつちがいい? あつちがいいか? 京都は優しいからな。」

高橋 「ひょいよニイザトも終りだ。フもつかまつたしな。」「お前が持つていたウトの住民票、誰が取りに行つたか解つたよ。」

岡田 「警視庁公安部つてすごいだろ。わしらこの三人だけじゃない。もっと優秀な人間が沢山いる。百人近い人が動いてるからな。一お前あの保険証一回でも使つたのかーなんでそんな事まで黙してるんだよ。調べたら直ぐ解ることやないか。」

「"砂の器"わしも観たけどな、お前どこで観たんだ? 暫く東拘へでも行つてるか。」

高橋 「ニイザト、お前昨年八月十四日から会社休んでるだろ。休んでどこに行つたんだ? 一お前が休む前の十三日夜に、警視庁の派出所でいくつも爆弾がハネてるんだよ。」

昨年の夏のやつ、あれお前らがやつたのか?」

岡田 「他から、どこがやつたか聞いてないか? お前だつたらあれどこがやつたと思う?」

高橋 「今だから言つてやるけど、お前を逮捕したのは、もう解決済みの事件なんかじやないんだよ。実は昨年の一連の事件が本命だつたんだ。」

6月4日

岡田 「帰つてくるの遅かつただろ。お前よりも長いこと話し

6月5日

清水 「今から取調べるけど、お前は応じるお? 何か話すか? 一だつたら房に帰つてろ!」

高橋 「その代り差入れは受付けんからなー。」警視庁七〇番は受けます。」じやないんだよ。持つてきたら突返してやるよ。」

朝、留置所受付に身柄を運行してきて。以後救援連絡センターより差入れは留置所看守のもとに受領する。

山に行つたのか？」

留置所看守「七〇番。明日東拘へ移管だ。通知があつた。あ

両手錠をはめられ、一本の太いロープにつながれる。

留置所看守「今まできた公安の中で、君が一番元気よかつた。

出たら、こんなところもう一度と来るなよ、な。」

6・1

留置所看守「七〇番。掛けが、調べ出るかどうか聞いてきてくれつて。どうする？」

6・8

岡田 「水が変つても、体には気を付けろよ。」留置所受付けにて。十九号調べ室に置いていたこちらのバンドや帽子を、留置所の方へ保管を移す。

6・9

F 「掛けが手離せないので代りに来た。」岡田達に代つて差入れを受取つたという四人。差入れを食べている間、こちらをじつと観察している。内一人は三十五才位。四角い銀ぶちのメガネをかけ、デニムの上下を着用している。

「山の道具揃えてたけど、ぼくも山へはよく行く。山へ行つてる時だけ気が安まつたんだろ。主にどのあたりの

#### △取調べを受けた時間▽

逮捕来初めの三日間は、朝九時四十分位から夜八時位まで。以後起訴前日の五月三十一日迄は、連日九時四十分位から、夜十時三十分頃まで続き、一度は夜十一時四十分まで続いた。検事の取調べは八回位。検事の調べは遅くとも夜十時迄であり、その時になると「あと、よろしく」と調室を出ていった。

拘置所に移管される迄の全勾留期間を通じて、一日十五分の運動にまとめて出されたのは六回位である。

6・10

東拘へ移管される者、地裁、地檢へ行く者がそれぞれ両手錠をはめられ、一本の太いロープにつながれる。

留置所看守「今まできた公安の中で、君が一番元気よかつた。出たら、こんなところもう一度と来るなよ、な。」

外は雨であった。

岡田昭彦 警部補。公安部外事二課。年令四十才位。身長一六五センチ位。自宅に犬を飼つてゐる。  
清水 某 昭和十七年生。群馬県出身。身長一七〇センチ位。下あごと右手の平に一センチ大の傷あと。あごが長くひげ面。唇をなめる癖があり、唇が厚くなつてゐる。剣道三段。

高橋 某 秋田県出身。年令三十才位。身長一七〇センチ位。警視庁本部に移る前は碑文谷署勤務。剣道が得意。東京地檢検事。年令四十才位。身長一六五センチ位。メガネをかけてゐる。

A 警部補。公安部(総務)課。年令四十五才位。

身長一六五センチ位。銀ぶちメガネをかけてゐる。髪がうすく額が広い。

B 警部。公安部(?)課長。年令五十才位。身長一六〇センチ位。どんぐり目。髪型オール・バッタ。

C 警部。公安部(?)課長。年令五十才位。身長一六〇センチ位。髪型オール・バッタ。

D 人見某。京都府警察本部警備課巡查部長。年令五十才位。身長一六〇センチ位。髪型オール・バッタ。

E 留置所では、同房の人が奴らの説得でスペイを働く場合があるので、不用意な会話を交さないこと。例えばその日迄の話しが打つて変わつて、急に次の様なことを言ひ出す時である。「前の留置場にいた時、赤軍派の日大的学生と一緒にいたが、その時「ニイザトが謀つてくれないからいつも帰れない。共犯がみんな謀つてしまつてゐるのに、なぜ一人黙秘してゐるのか解らない。なぜなの?」とスペイを働くので注意すること。

プロレタリア革命を準備する幾多の仲間達へ。以上が、奴ら公安部検事と政治警察が得意気に謀りまくつたことです。

# 麻布署 22号・1号のたたかい

△佐藤秋雄氏の場合▽

5・11

朝七時三十分頃より「回覧、回覧、回覧ですよ……」の声に起される。

家屋と家屋。アパートとアパートの間の人一人通るにやつとと言う境に、ガラス窓にうつる人影数人。部屋の入口ドアより二十cm上に煙穴、この穴より部屋をのぞく男の顔。

七時四十分すぎ、アパートとアパートの間にいた人影は、ガラス戸を開け土足のまま部屋へ雪崩込む、私服はすかさず入口ドアのロックを内側よりはずす。更に、廊下にいた数人が部屋の中へ。

四月二十八日発行の令状提示。七時四十五分頃逮捕。

警視庁地下調室、弁解録取黙否。被疑者は弁護人選任を要求。デカ拒否。指紋一度やりなおし、二度取る。

麻布署へ、留置番号22号。

昼より麻布公安調査室で供述調書の録取はじまる。

デカは、階級、所属を明らかにしないまま「調官主任、坂

本」であることを告げ供述調書を用意し、一人書き出す。

坂本「四月十八日都立小金井公園に何をしに行つたか、木村こと新里良光を知つてゐるだらう」一人ごとを言つてペンを走らせ、「黙否調書じやあやめた」「調書を取らなから喋れよ」

調査には人口と奥に一つづつ机あり、奥の机に向い合いで椅子二個、椅子は他に三個ある。五畳ぐらいの細長の調査である。

九才）「イマチヤン」（巡査・今村三十四・五才）

坂本三十六才を主任とする三人一組の体制

十時場内4房独居

5・12

坂本「お前はとんでもない奴だ、ひとの名前を使われたやつは実在するそじやないか。悪いとは思わないのか。オ

イ、新里良光を知つてゐるだらう。何か渡したんだ、オイ、爆弾でもやろうと相談か」

坂本「お前は、警察官の名前を調べたり、警察のことについてひどく詳しいな！何んのつもりだ、オイ。警察官でてもなろうというのか。どうなんだ！」「オガチヤン」は、終始、調査入口の机を前にメモをとる。「イマチヤン」は坂本の喋べるのを聞きながら22号を睨みつけている。

十二日より調書の用意なし。

昼前「弁護士が来ているがどうする、会うか？　なに会わない。なんだ会うのか。」

昼すぎ検事がくる。わずか一〇、五分で帰る。

坂本「早いなー二十分いたかー。」検事と入れ代わる。

昼から、坂本は黙否について本人のためにならないことを吹聴し、弁護人活動が捜査の支障をきたすことを盛んに強調する。

坂本「黙否、黙否とバカの一つ覚えみたいに良い年こいでいつまで、ガキみたいなことしていいんだ。事件と関係ない事ぐらい喋べれ、九条に関係なけりや喋べっても良いだろう。」

坂本「お前、山谷で立んぼやつていたんだつてな。あそこは人間の脣の集るところだよ、脣。解るか、お前も人間の脣だ。山で活動していいたのか、山谷鬭争委員会なんて言うのあるのか。」

坂本のウシロ横手より突然「赤軍の救対をやつていた

5・13

九時すぎ小河原場内へ。午前中、小河原・今村雑談つづく。昼少し前坂本、調査室。小河原と合手錠地蔵へ。坂本と車運転手の会話。追跡班の車を使用とのこと。拘留決定麻布調査室。

坂本「釈放にでもなると思っていたか、新里も來ていたのだ。お前がパクラセたようなものだ。悪いとは思わないのか、オイ。」

坂本「都立小金井公園で何を話し合つたんだ。美濃部になつてから、都立公園無料にするから、お前らみたいのが行くようになるんだ。美濃部のやることはロクなことがない。競輪廃止して、財源がないとか、税金の値上がりだ。オイ、小金井公園には何しにいつたんだ。○○が四十分も遅れたのはどうしてだ。何とか言つてみろ、このバカ！」

坂本「山谷では一日働くといくらぐらいになるんだ、仕事は運動中に看守、「佐藤調べだ」

坂本「山谷では一日働くといくらぐらいになるんだ、仕事は

5・14

あるんか。オイ、佐藤。黙して語らずか、お前、女はどうしていたんだ。好きなのいないのか。立ちんぼやつて、トルコか。お前の行くトルコは、いくらだ。お前酒はやるんか。」

小河原「南千じやあいつもどこでのむんだ。南千は安いからなー。」

坂本「お前ら、日向派と内ゲバもあるのか、日向派つて何んだいオイ佐藤黙否して何になるんだ、こんなことは事件と関係ないだろう。黙否とは自分に不利になりそうな時だけ黙つていりや良いんだ、事件と関係ないことは喋べつても良いんだ、そのくらい解らんのか。何んでも黙していりやあ良いと言うもんじやないんだ。」

5・15  
朝から、給料とボーナスが一諸に入ると言うのでハシャいでいる。

坂本「オイ、佐藤、お前のバックボーンが何んであれ、そんなの関係ないんだ、バクダンは絶対によくない。お前みたいのがいるから世の中良くならないんだ。われわれ市民警察はお前ら見たいな悪から守るためにあるんだ。見ろ、毎日一一〇番には、情報がくるんだ。いくら人の名前使つてもお前みたいのはすぐ情報入るんだ。聞いてる

のか、親からもらつた名前じや生活できないのか、オイ、聞いているのか。この脣野郎。」

小河原「佐藤君は、尾行まくのがなかなかまいらしいじゃないか、今度ばかりはダメだつたなー、やはり商売にはかなわないなー。」

坂本「この野郎なにが非合法だ、何んなお前のことは解つて、いるんだ。仲間をパクラせて、友達には迷惑かけさせて、それでも指導者か、聞いてあきれるよ、このバカ、何んとか言つたらどうだ。山谷じやあ、お前みたいなのについてくるやつはないだらう。それとも、立んぼと一緒にバクダンでもやるつもりか」

5・16

同志新里のメッセージこの頃受けとる。同時に、旧蜂起派の獄中全同志より「完黙せよ！」と激励される。特に、同志岩崎からは、電報によつても激励を受ける。

坂本「お前の行動は矛盾だらけじやないか、非合法を言つて、人の名前を使ひ、仕事は本名でやり、山の立んぼ仲間じや佐藤で通つてゐるじやないか。これはどういうわけなんだ。オイ聞えてゐるのか、腕組みしないでちゃんと聞け、矛盾だらけの行動をとつて、何が非合法だ。何か言うことはないのか!! 責任をとれよ、責任を、何んに迷

原 「オイ、小林君紙をくれ」事務官小林である。

小林は部屋入口の机に座つてゐる。普段は、小河原か今村が座つてゐる位置である。

原 「どうだ、君の活動歴を教えてくれ、ウム、君はどうして活動始めるようになつたのか、ウム、どうだ、話してみないか、いろいろ矛盾を感じて始めたんだろう。いつもごろからだ、ウム、手伝つてやるから君の自伝を書こう、記念になるぞ、どうだ」

原 「君は前にも逮捕されているな、どうして逮捕されたのだ、ウム、今回の事件に関係ないのだ、どうだ、このぐらいのことは君イー、話しろよ。何んな、雑談ぐらいはするんだ、君ももつと大人になれよ、弁護士に会つたか、小山先生と言るのは面白い先生らしいな。面会の別れぎわにデカイ声で『黙否でガンバレよ』と言うらしいな、法を守る先生がそうゆうことではこまるんだ、まあ、君は、そんなことを本気にすることもないだろう、自分の判断で、黙するところは黙し、弁解するところは弁解すると、そのぐらいの気量がなければならん。ウム、どうだ。先生は何か言つていつたか。」

夕食後坂本に代る。

坂本「オイ、検事は何か、喋べつていつたか、ウ、明日もくると言つていつたかどうかなんだ。」

午後より検事調べ。検事は原と名のり、事務用紙とペンを机の上に置く。

5・17  
小河原「佐藤君がいくらそんことやつても誰れもオドロカナイヨ」  
坂本「公妨にならないか」  
小河原「佐藤君がいくらそんことやつても誰れもオドロカナイヨ」  
坂本「公妨にならないか」

5・17

小河原、場内へ、今村、看守部屋で待つてゐる。公安調査五階まで腰ヒモを小河原が引いてゆく。今村22号のけつからついてくる。

坂本「お前の行動は矛盾だらけで、さらざ派と分裂したんじゃないのか。お前何をやつてもダメなんだ。もう革命なんてやめろ」

「オイ、良く考えろ、今晚は寝ないで考えろ、このバカ！」

仲々良いところだよ。」

5・18 午後より検事調べ、昨日と同じく机に紙とペンを並べる。

午後三十数日間変らず。

原 「君は、千葉正健を知っているか。ウム、君イー。彼は正に堂々と世界革命論を説明してくれたよ、彼は立派だった。第二次ブンドは自分が作つたぐらいのことを言つていたよ、指導者はそれぐらいじやないとダメなんだ、千葉君はブンドでも偉い方じやなかつたのか、どうだ。君も少しは喋べれよ、ウム、どうだ。塙見だつて雑談には応じているし、供述書だつて、ちゃんとあるんだ。塙見の供述書は、公判で必ず出でてくる。今見なければ持つてきてやつても良いんだ。どうだ見るか。君のことを調べてきたが供述書は一つもないな、黙して語らずか、ウム、47年の公妨とは何だ。処分保留になつていてるが、何の公妨だ、どうだ。この時も、君をつけていたら、岩崎をパクレタと刑事連中は言つてはいる。君の顔は特徴ある。どうだ、こんどは、だけうちでも連れてくるか、ウム、」

原 「君は旅行は好きか。北海道に行つたことはあるかウム、どうだ、僕は、札幌地裁公判部に二年ばかりいたんだが、

5・19

午前、奴らは勝手に雑談。22号はタバコをすつてゐる。今村は、金魚の水槽飼、盆栽について多弁、小河原、柔・剣道、空手などについて多弁、小河原、金魚の水槽飼について今村におしえてはいる。新居か転居かいすれにしろ小河原は、せつと挨拶状を書いている。坂本は住宅ローンか、銀行利子か、職員共済会?かいざれにしても借金のことをコソコソ話をしてはいる。

午後

原 「新里は物静かな好青年らしい。調室で悔し泣きをしているそだ、どうだ、何か伝えてやることはないか。君勾留理由開示裁判はやらないのか、どうだ。本部から動員してやるぞ。」

原は押収したメモを机にひろげる。半紙に図解入りのメモには、次のようなことが書いてある。71・72年当時の被逮捕者

者の「取調べ」状況がメモされてはいる。原はメモを指差し、

原 「君、この反革命とは何か、ウム、量刑どう喝とは何か。どうだ、このメモは君の部屋にあつたそだ、説明してくれ。責任論、家族や友人への弾圧、この弾圧とはどうゆうことか、どうだ、説明してくれ。ウム、どうだ、爆弾などやる奴は火つけ強盗より悪い。君はひとの名前をかたつて、アパートを借りたりしているから、私文書偽造の詐欺師だ。爆弾など絶対に許さない。どうだ、何か

弁解することは無いか。君たちの機関誌では爆弾闘争や武装闘争を主張している」押収した機関誌を小林から取り寄せる。

原 「連合赤軍の森や永田洋子の文章は非常に解り易かつたが、この「蜂起左派」は、革命的だ、戦闘的だ、非合法とかの言葉が多くて読みにくく、どうだ、読んでくれ。裁判官も、非合法、非合法と書いてあるので、これは釈放したらすぐ地下ですね、と言つてはいたそだ、どうだ、非合法は良くない。追いつめられて、結局連赤のようになるぞ、日向派も、さらぎ派もデモをやつてはいるそういうのないか、どうだ、非合法やめろ、闘争のやり方はいくらもある。爆弾や非合法なことは絶対許さない。どうだ、やめろ！」

夕食、坂本たちと入れ代りぎわに令状請求のことをちらりと話す。

坂本「ハンダ付のあとのあるトラベルウォッヂのケースはどうしたんだ、リード線は土方に使うのか、土方には、どのような工具を使うんだ、お前のバックボーンが何んであれ爆弾などは、革命と関係ないんだ。お前は、逮捕されて敗けたのじやあないのか、お前がそう言つてはいるだろう。友達には迷惑かけて、敗けたら男らしく責任をとれ、昔の武士は皆腹を切つて責任をとつたんだ。お前は責任もとれないのか。森をみろ森を。佐藤和は立派じや

現在進行中のシャクシャイン像、他アイヌ公判闘争について、太田竜の公判廷における態度について、克明に証する。「道警」「道庁」とからめていることは確かだ。

原はついに似顔絵を書きはじめる。小林はドアを少し開けてタバコをすつてはいる。22号もタバコを要求する。似顔絵をカバンに入れて帰る。

六時、夕食後坂本、

坂本「検事に何か喋べつたか、検事にだけは何か喋べつたが良い、オイ、乞食野郎何か言つたらどうだ。俺は、九州男児だ、腹を割つて話し合おうじやないか、どーんとぶつかつて来いよ、オイ、聞いてるのか、」

横手より「佐藤君、リード線はどうしたんだ。」小河原。坂本「お前らのバックボーンとか信念とかそんなもの関係ないんだ。お前は生田よりも人気も、信用もなかつたんだ、そうだろう。矛盾のある行動ばかりで、信用ある訳がないんだ。爆収九条と言うのは、普通刑法の犯人インピと違うんだ、解るか、保釈や猶予はないんだ、オイ、聞いているのか」坂本部屋を出る。

小河原は、部屋を出たり入つたり忙しい。

十時場内へ、4房独居、この頃、スタンダード労組の○○氏東拘移監

あないか、本部の調室に来て倒れるまで黙つて死んでいたんだ。お前は責任もとれないどうしようもないバカだ。」

5・20

朝三時頃<sup>4</sup>房独居から7房雑居へ移される。留置場を管轄とする刑事課長は必ず、場内巡視にきたときは、ニコニコ<sup>22</sup>号に挨拶する。

小河原「昨日は、佐藤君もついに、火つけ強盗にされたなー、

検事も悪いこと言うよ、詐欺師まで言つていつたろう。」

坂本「オイ、身体を継続的に動かすな、いわれたことは守れ、

指導者らしくしろ。ヤメロと言つたらヤメロ！」机を一

担<sup>22</sup>号にブチ当てるよう押してから一メートルぐら<sup>1</sup>い<sup>2</sup>22号から引き離す。

今村「佐藤君やめろよ、何回も同じことを言わせるなよ」

この日は、朝から、室内における動作、姿勢について注意するさい。腕組みに對し、足組みについて、指を継続的に動かすことについて、足を継続的に動かすことについて、

昼より検事まち、坂本、調室に入つてこない。公安課は、何やら騒々しい。本部より何人かきて打合せの模様。

調室の隣警備課と湯沸室、前が廊下をはさんで、暗室と公安課デカ室、警備課は、乱闘服に身を固めた「野獸」の声が四六時中ウルサイ。夕方は酒盛が常である。ラジオか、テレ

ビカ、酒盛の騒音と一緒に調室へ、奴ら、デカにとつてはやりにくそうだ。

原 「早稲田事件の革マル〇〇（名前忘れた）も最初は黙否定たよ。彼はついに人間革命に成功した。級友を殺すのは間違つてたと言つて、革マルもやめた。裏切だ、反革命だと革マルは言つているそつだが、〇〇君にとつては、その方が良かつたんだ。

46年の三里塚闘争の時、僕は機動隊のウシロから状況を見ていた。あの事件も、僕は調べをやつた。あの時も、弁護士が差し入れていつたもので受けとらない奴がいた。名前も黙否しているのに名前を書いて差し入れていくなんてとんでもない。と怒つてゐるんだ。

5・21

坂本「どうだ釈放されるかも知れないから、三文字の社長に柄受けしてもらうか。仲々話しの解る人だそうじやないか、どうだ電話連絡するか、社長に来てもらうか、何んだお前黙つていて、出たくないのか。」

坂本「山じやお前、佐藤で仕事していいたそうじやないか、立ちんぽはお前のことを皆佐藤さん、佐藤さんと言つてゐるんだ。アパートをひとの名前で借り仕事を本名でやり、

車の免許をとつたり、お前は革命家失格だ、お前の行動は矛盾だらけだ、非合法と言とは、ベンで通すなら、ベンで皆通すんだよ、何が革命だ、何が非合法だ。もうやめろ！このバカ！」横手より「一月大井町の『まめそ

う』の筆談は何だ。」小河原

坂本「お前のやつていることは皆解つてゐるんだ、お前がいくら黙して語らずでも全部解つてゐるんだ、喋べれ、オイ、何とか言つたらどうだ。頭にきたらいくらでも文句言つてくれ。オイ、新里良光を知つてゐるだろう。何だお前はORGさせていたのか。」

坂本「今の荒派と日向派はどうゆう関係かね、佐藤君 教え

てくれ、日向派とゲバやつたことがあるだろう、今はどうなつてるんだ。」

小河原と今村クスクス笑つてゐる。22号は、押収品目録交付を要求して受けとる。

午後

原 「君のところからは、いろいろ化學式が出てきたり、○○のところからは実驗結果のメモがでてきたり、黒色火薬もあるし、どうだ、ウム、ミルク管も○○のところにあるし、君のところは鉄パイプもそろつてゐる。いわゆるバクダ<sup>ン</sup>七つ道具は全部そろつてゐる。どうだ、どこかでもうやつてゐるんではないか、ウム、どうだ、い

坂本「お前らのバックボーンが何んであれ、信念がどうであれ、そんなの関係ないんだ。爆弾は無差別に人を殺傷するんだ、こんなのは許せないんだ、この人殺し、何んとか言つてみろ！」

夕食後

坂本「お前らのバックボーンが何んであれ、信念がどうであれ、そんなの関係ないんだ。爆弾は無差別に人を殺傷するんだ、こんなのは許せないんだ、この人殺し、何んとか言つてみろ！」

三時休み おわり

坂本「オレは、一人言を言つてゐるんだ、頭にきたらいくらでも文句を言つてくれ。これも調べの内だ、個人的な感情で言つてゐるのではない。調べ官として言つてゐるんだ」

坂本「お前らのやつてゐることは線香花火のようなんだ、でも文句を言つてくれ。これも調べの内だ、個人的な感情で言つてゐるのではない。調べ官として言つてゐるんだ」

んだ、お前らのような人でなしに解つてたまるか、この大バカものが、全くお前みたいのをカエルに小便と言うのだ、この中年野郎、こんな中年相手は二度と願い下げだ。公安十年もやつてゐるが、お前みたいな乞食野郎はじめてだ。」

夜中一時ごろまた、4房から5房へ移される。

朝食後、壁に寄りかかつてゐる22号を巡視にきた麻布公安、

係長（警部補）

菅原「オイ、佐藤ちゃんと起きていろ！」

22号「ウルサイ、イヌ野郎」菅原「何を！」飛んでくる。

菅原「バカを相手にしてもしようがない」と捨てぜりふを残して場外へ。

坂本「なんだつて、お前今朝、留置場で菅原さんに文句言つたんだつて、何んて言うチンピラみたいなことするんだ、十回も逮捕されていて解つてゐるだろう。われわれもカッコ悪くてしようがないよ、麻布みたいに良い留置場はないだろう。本部は大変だぞ、本部に行くか、本部の調室は冷房も暖房もないし、防音措置もできてゐるし、本部でやるか。」

坂本「お前はあづかりなんだからおとなしくしていないとダメなんだ。」

午後より

夕食後  
坂本「オイ、火つけ強盗何んとか言つたらどうだ。お前みたいのは、山谷あたりで野タレ死ね。この乞食野郎！何んだお前、検事に、坂本は眞面目なデカだと、この野郎、ふざけた野郎だ、お前にほめられることはないとダメよ、このクソタレ！」

5・23 午前中、

小河原と今村の会話、警視庁、皇居一周マラソン大会のこと、デモ規制のこと、金魚のこと、つづく。

今村「10・21騒乱罪のときは、新宿駅構内から機動隊に学生と一緒に追われ、青梅街道の大ガード下に飛びおりた、ああゆう時は不思議とケガしないなー」

小河原「6・17のあの明治公園のときはもう助からないと思つたなー、このキズ見てくれ、こんなデカイ石をぶつけられて、イヤーまいつたよ。」オデコにデカイキズアト。（ホントかドウか？）

原「君は何んでさらぎ派と分裂したんだ。さらぎ派の合法主義とは何んだ。さらぎ派にはどんな人がいるんだ。どうだ、この『蜂起左派』といふのはほんとにむずかしいな、少し、説明してくれ。どうだ、なんで、分裂したんだ」押収品『蜂起左派』をパラパラメクル。

原 「君たちは内ゲバでもあるのか、鉄パイプはどうした。どうだ、説明してくれ。爆弾の実験をやつた。ウム、どうだ、いろいろ勉強して、ウム、どうだエネルギーの無駄ではないのか、連合赤軍も、山ごえを幾つもして、アジトを作つてはつぶし、作つてはつぶし、すごいエネルギーだな、アトを残さないようになつぶす。」

穴を堀つて、うめるのも、堀つた土を雪のうえに出しては、マズイと言うので、ビニールを一面に敷いて、そのビニールのうえに土を盛り、そして穴を堀つたらしい。その穴をまたうめる訳けだからな」原は、連合赤軍の山岳ベースのエネルギーと処刑と逮捕・各人が自供にいたるまでを克明に話す。

原 「君たちも一人ぐらいい処刑してゐるのではないか。ウー、どうだ、除名をしたことがあるだろう。」押収品文章を一人見てゐる。  
「警視庁の刑事車中の話しによると君達の所を幾つもガサをブチ込んでみて、君は、一番助平だと言う話しだよ、部屋にはカレンダーワークのポスターをはつてあるそうじやないか。ウム。どうだ、結婚はしないのか。」「平蔵の出番だな！たたきだよ、たたき。」「千葉君は、オレは、左翼だ、公安で調べてくれ、と言つたそだが、君は強力班だ。火盗攻めだよ！」「

原 「よし、今晚は、この本をもつてひつて勉強してこよう。オイ、サカチヤンを呼んでくれ」坂本たちと入れ代る。  
坂本「お前兄弟は何人だ、親父の葬式に行つてゐるようじゃあ革命はできないぞ。福島県安達郡と言うのはどの辺だ。高校は何処だ。」

小河原「会津に行つたことあるなー。婦警さんと仲良くなつて良かつたなーあの時は。スカイライーンを通つて、飯坂に泊つたのかな。福島もなかなか良いところだよな。」

5・24

この頃、センター・弁護士経由で一万円入る。

坂本「オイ、車の免許の住民登録はどうしていたんだ。会社に車あるんだろう。会社の車運転していたのか、運転はうまいのか。オイ何とか言つたらどうだ。どうだ、高速など走つたことはあるのか、東名高速など何キロで走れんだ、オイ、名古屋の市内地図はどうしたんだ。名古屋に行つたことあるだろう。何にしに行つたんだ。」「佐藤君はいつも、どこでのむんだ。駅前の鶴が、駅の横手にも、赤提灯あつたなー。あそこも安いからなー。どのくらいのむんだ。」「君は、福島だそだが、僕は岩手だよ、同じ東北だ。どうだ、田舎の話してもしてくれ。田舎は農業か、誰れ

がやつてゐるんだ、兄貴か、姉さんも、いるんだろうどうだ。」

5・25

公安課は、この一週間騒々しいが、午後、調べ室に、老刑事が入つてくる。

入口で坂本が様子をうかがう。老刑事は静かに22号の前に座る。老刑事開口一番、

「佐藤展望ないだろう。もう年貢のおさめ時じやあーないか。どうだ、もうやめろ！イーエー。四・五人じやあどうしようもないだろう。デモ一つ出来ないんじやあないか。」

「何！自己紹介しろだと、ふざけるんじやないんだよ。バカ野郎。ガンと一緒にお前をパクッタのはオレだよ。忘れたか。イーエ。ひとの名前を使って生きているような野郎に名前なんか名乗る必要ないんだ、バカ野郎！」

「国井だよ、国井！」

一時間ほど睨み合ひ、国井は静かに部屋を出て行く。

小河原「あれはないだらう。国井さんに、自己紹介しろ、なんて、失礼だよ」

原 「46年10・21渋谷駅前の交番に火災ビンが投げられたが、あの時一人つかまつた、あれは誰れだ、あれも蜂起派だ賀状がくるよ。」

原 「君は、社事大と言うの知つてゐるか、原宿のところのな、あそこの学生も、バクダンできたんだ、未発だったが、皆よく話してくれたから、これも起訴しなかつたんだ、いまでもサークル活動やつてゐるが、機関紙?を送つてくるよ！どうだ、君も、出たら、一つ機関紙でも地裁の原で送つてくれ、どうだ、ウム、なんだ、君は47年の事件の証人になつてゐるらしいな。君の演説を早く聞きたいものだ、どうだ、何を証言するのだ！ウム」

原は盛に「更生」を吹聴し、処分権限をひけらかす。

坂本「お前に名前使われた奴は厳重に処分してくれといつてゐるらしい。そいつとお前の仲だちをした友達は、会社で非常にまずい関係になつてゐるそうだよ。爆弾犯と友達じやあ一具合悪いよ。お前友達に悪いとは思わないのか、何か伝えることはないのか、お前が黙つてゐるなら私文書偽造で再逮捕するからな、材料は何んであるん

ろう。どうだ、君の兄姉は、君の活動に理解があるのか、

一番上の姉さんはどうしてゐるんだ、皆元気か。どうだ、親父さんがなくなつてゐるそつだが、財産はどうしたんだ。ウム、どうだ、財産はどうしたんだ。君は氣楽だな、誰れにも心配してくれることもなく、好きなことをやれ

て、どうだ、田舎にはいつ帰つたんだ。」46年10・21闘争における甥を問い合わせ正そうとしている。

5・26

坂本は、似顔絵を書いては捨て、書いては捨ててゐる。屋すぎ、小河原一人となる。小河原は横を向きながら話しかけてくる。

小河原「どうだ、佐藤君、起訴しないと言う約束で話しをしないか、まあ、オレには責任をもてないが、正直に話しろよ。起訴しなければ別に良いだらう。新里を知つているんだろう。オレにだけでも話しあるよ」

原 「どうだ、ペンを貸すから好きなこと書いて見ろよ。広島地検で、酒のみの人を調べたことがあるが、この人も僕はついに起訴しなかつたよ、この人は、アル中で、酒をのむと記憶がうすくなるらしい。ある一杯のみ屋で酒をのみ、帰りぎわに、自分の乗つてきた自転車と間違えて、ひとの自転車に乗つて帰つてしまつたんだな。窃盗

だ。そんなに黙つていて、警視庁四万を敵にまわして勝てると思つてゐるのか。」

小河原「木更津の玉半て何んだ」

坂本「お前逮捕されると言うことは敗けることではないのか、お前がそう言つてゐるだらう。いさぎよく責任とれよ、このクソタレ！早く死ね！」

場内に入るとまたまた、房の移房、5房雑居から4房独居へ。

5・27 朝

朝、看守「そこの4房はちょうど昨年の今ごろ大道寺が二ヶ月ぐらいいたんだよ。そう言えば、昨年も今年も同じようになつてゐるなー。」

坂本「ゆうべは寝れたか。寝れないだらう。悪いことをやつてるやつは、夜も寝れないんだ。オイ聞えているのか、新里良光を知つてゐるだらう。」腕組をして喋べりまく

る。小河原、メモをわざわざ22号に見えるようにして書いてゐる。メモには06の頭文字ではじまる電話番号が書いてある。坂本ちらりと小河原を見やる。小河原メモをかくす。机上にカバンでつい立てをつくつてメモをとる。坂本「爆弾やるようなのは、絶対放しておかない。何か、言つことは何いのか、警視庁公安を敵にまわす氣か。よし。」

昼食事、今村、お茶をくんでくれたり、トイレに連れていつたり、野球の話をしてくれる。小河原スポーツ新聞を22号に見せる。

原

「君は○○省によく出入しているそなだが、友達でもいるのか、どうだ、話してくれ。君達の内部はまた分裂らしいぞ、君を権力に売ったといつて内ゲバやつていてるらしい。どうだ、何かないか、○○も逮捕するぞ、良いのか。」

「よし、徹底してつぶしてやる。全部ガサをブチ込んでやる。」

「72年、当時のを入れると七回逮捕できる、百五十日は徹底的にしめ上げてやる。」

原は捨ゼリフをはいて、二十八日以降こなくなる。

夕食後、坂本「なんだって、七回も逮捕してくれるつて、検事がそう言つたか、まだまだこれからだな、ひとからもらつたものを喜んで食つて乞食みたいにせいぜい頑張るんだな。そのうちまいりましたと言わしてやるよ。後百五十日か、

しかし、こんな処女から未亡人まで知つてゐるような中年はどうしようもない、このバカ！お前は大バカ者だよ！」

坂本「今回も検事くると言つてたか、オイ、立つて運動やれよ」逆立ちさして両手を離す。

昼食後

坂本

「なんだ、お前のベンの羽山は、田舎の山の名前じやがないのか、地図を見ていたら羽山と言う名の山があるなこの山は、小学校の遠足とかそうゆうときに登る山じやないのか、この野郎とんでもない奴だよ。ベンに田舎の山の名前なんか使いやがつて、お前みたいな火つけ強盗に使われたんじやあ迷惑だよ。郷土愛と言うのは、もつと良いことで使わないとダメなんだ、お前は、その羽山に登つたことはあるのか、どうなんだ、バカモソ」

坂本「椅子に背をもたれるな。ちゃんとして、この椅子は、ギイギイ音もするし、取り代えないとダメだな。調官より、良い椅子に座つて、とんでもない。そこはもともと調官が座るところなんだ、こら！身体をゆすつて音をたてるな！何、トイレ、トイレなど行せない。テメエの言いたいことだけ言つて、んじやないんだ、このバカ、何がトイレだ、勝手にしろ！」

5・29

朝、小河原と今村、家族連の慰安会（一課？）について、

話してゐる。

坂本「土方は、どうゆう道具を使うのだ。ドライバーやハンダゴテなど使うのか、何んだ、土方だけではなく電気屋もやるのか、仕事の話しぐらい 教えてくれよ。このバカ、事件と関係ないだろう。」

小河原「駅前のパチンコ屋はでるか、山のパチンコ屋はどこも出ないからな、佐藤君は、いつもどこでやるんだ。ペールはどうだ、オレは元南千にいたんだよ、あの辺は詳しだ。佐藤君はパチンコは下手らしいな。地下鉄の駅前一杯のみ屋の『大利根』、そこは安いな、ナンセンセんあたりじゃー、五〇〇円もありやーヨッパラウ程のめるよな、佐藤君はいつもどこでのんでいるんだ。」

坂本「三文字の社長に、活動をやめることで柄受け頼めよ、電話するから。活動やめて、土方の親方にでもなれ、三文字の社長は、お前を雇うと言つてはいるのだから、真面目に仕事でもやって、土建やの社長でもやれ。」

坂本「お前、ゆうべは、考えたか、寝る前に考えろと言つたの解らんのか、お前、まだ考えが足りん、何、考えていいんだ。はつきりしろ、腐つた女みたいに黙つているんじやないんだ！何とか言つたらどうだ、このクソ野郎！」

5・30

5・31

小河原「佐藤君、赤軍のSとは親しいのか、俺も赤軍はだいぶ追つたなー、Tなんかすつかり、顔なじみになつちゃつたよ、○○もよく開拓社に来ていたなー。彼女は、弁護士と寝たとか何んとかいつて、メモしていたぞ、佐藤君は知らないだろうなー。」

久しぶりに風呂をのんびりやり、洗濯をやる。朝から、金魚の水槽飼について話している。小河原の金魚死ぬ。今村に、殺すために飼つてはいるようなもんだと、ヒヤカされる。どうも、小河原は独身者らしい。昼食事、22号に新聞みせる。坂本「オイ、明日は、釈放だ、なんて考へていたら大間違いだぞ、まだ、あと七回あるんだ、一五〇日はあるんだ！解つてはいるのか、オイ、佐藤！四月の十八日は何處にいたんだ、新里良光知つてはいるだろう。ガキみたいに黙つていりや良いと言うもんじやないんだ、何とか言つてみろ、オイ！このバカ」

「全く、胃が悪くなる。」調室を出る。

坂本、朝から落つかず、22号を睨みつけては、調室を出たり入つたり、昼食直前本部より電話、坂本喜んで「一時まで

にもどるから、あとをタノム」と、ドアを開るなりドナルドにして、「オガチャヤン」に伝える。

坂本四時頃もどるも調査室をジロリのぞくダケ、22号の前に座らず。

四時三十分すぎ、あわただしく場内へ、十分もしないで、釈放と言つて看守がくる。場内・看守部屋で釈放手続きをとつて麻布署受け付け通路へ出てくる。麻布公安二名（一名は例の菅原）ピタリと後につく。四階、階段のところで坂本ニヤニヤ。

麻布署玄関、私服約十名、制七・八名、乗用車二台横づけされている。玄関ドアを押して身体が出たところで、私服がドート押し寄せ、令状提示と同時に、署内へ押し入れる。逮捕時五時すぎて、合手錠となり車で、警視庁、地下調査室へ、令状の再度の提示を要求。令状請求は国井重夫、「5・11」についての連絡部長は国井である。逮捕者は外事一課〇〇千盟、芦屋拓馬、※。

弁解録取黙否、外事一課〇〇（忘れる）千盟、補助、芦屋拓馬、小河原は控てている。22号はタバコを一ブク再び、麻布署へ、留置場へ、留置番号、1号となる。

早速く調べ始まる。坂本ニコニコ調査室へ入ってくる。

※芦屋は、盛んに、アパートのこと、不動産のことを、こそそと耳うかする。

たまに若い看守を相手に「韓国や台湾は弟のようなものだ」とアジル、看守ニヤニヤ聞いている。「児玉先生は、息子と毎晩酒をのんでいる。先生は何も悪いことやっていない」と、房内同居者に説明しきり。1号は、右翼氏にさからわず（房内にいるのは夜中から朝食後までのわずか）居ねむりしているか、房内を走りまわって運動している。

6・2

朝、麻布署鑑識課「定年間近」のデカによる指紋。小河原「さすが鑑識課だ、一発でキレイに取れる」

五月十一日は一回 やり直し、五月十八日頃、また前のは

ダメだつたと言つて、麻布鑑識より指紋微取の道具をかりてきて、「頼むからもう一度とらせてくれ」と言つて取つたので、今回は一切麻布鑑識に頼んだようである。

この日は、奴らダラダラと指紋のとり方や盆栽のことを勝手に喋べつてゐる。

昼より、検事、原、「何か言うことがあるか」わずか十分と座つていはず、

坂本「オイ、佐藤君、再逮捕された心境を聞かせてくれ、だんだん、一条に近づいてきたな。後六回も逮捕できると

は……。お前警官にバクダンでもブツケルつもりだった

坂本「どうだ、佐藤君、まさか再逮捕されるとは思わなかつたろう。今の気持はどうだ、玄関をなかなか出なかつたな、どうしてたんだ。逮捕状見たいか、逮捕状見せてやるからゆつくり見ろよ。見たいときはいつでも見ててくれ、ここに入れておくから。逮捕状見て頭にきたらいくらでも言ってくれ。何か言うことあるんじゃないか、ウソならウソだと言って良いんだよ、何か弁解しようよ。もう調書とらないから、本部で弁解もどうせモクつたんだろう。ひまさら調書はとらないよ。弁解しろよ。」

令状は「一月まめそう・白鳥、五月玉半で警官に危害を加えようと共謀した」となつてゐる。爆取四条。

五月三十日から三十一日（忘れた）に、4房から2房に移されていた。六月一日夜より麻布1号は移監までこの2房から移房なし、刑事課長はわざと「もう移房しませんからね」と告げる。この2房は、旧東声会・現交和会（児玉ヨン夫）右翼政治団体の幹部が高輪署より麻布に五月末まわつてくる（青思会は、この交和会の青年組織である）。もう一名は、國粹会の幹部である。この二名に1号を加えて、三名が、この2房の長期在房者となる。他三名ほどが出たり入つたりしており、常時五～六名が在房している。この右翼氏は、デカにシャベリすぎると言うので場内では評判が良くない。この右翼氏の自論、「喋べることによつて自分は責任をとるのだ！」

なんか、本部新しくするので、古くなつた今のも壊わすのに、バクダンでも仕かけてくれ。」

小河原「佐藤君のバクダンくらいじゃあ本部は壊れないよ。本部の屋上は一メートル以上のコンクリートの厚さだ、戦時中、アメリカの〇〇（忘れた）爆弾落しても大丈夫のようにしてあるらしい。」

坂本「まあ、お前も、私文書偽造の逮捕よりは、爆取の方が良かつたろう。オイ、逮捕状まだ見るか。」

坂本「今夜は良く考えて寝ろ！」

6・3

十一時四十分すぎ麻布を出る。十二時地裁必着遅れる。坂本運転手に文句を言う。運転手追跡班の車空いてなかつたと弁解。坂本と合手錠。

十二時すぎ、食事を要求。

坂本「帰りまで待て」

一時すぎ、パンを今村買つてくる。

坂本「君の所持金からパン代引いておくからな」

三時頃麻布署留置場で食事。

五時すぎ 調べ。

坂本「これからは、タバコをすわせない。今日は、俺の面子

丸潰れだ。前田もきていたんだ。この野郎、前田がきているのを知つていて大声出しやがつて、今日からはびしびし調べる。」

坂本「『革命戦争の第二期を切り開くために（？）合法主義と対決し、強固な地下党建設をかちとれ！』」と題する押収文章を読み出す。

坂本「政治警察とは何んだ、政治警察とは、どこかにそんな警察あるんか、日本には市民警察きりないんだ。それとも、どこかに政治警察と書いてあるんか、この爆弾破壊セン滅戦とは何んだ。お前らは、爆弾やると言つてゐるじゃないか、お前みたいな爆弾犯をつかまえるのが、市民警察なんだ。このバカ野郎。」

坂本「木更津の玉半では何を相談したんだ。機関誌も公然をやめて、そろそろやろうと相談か。何とか言つたらどうだ、乞食野郎、アパートを他人の名前でかりて、自分のところで、どうして相談できないんだ、金かけて、何んで、木更津まで行つたんだ、どうなんだ、このバカ野郎！」

#### 6・4

調室、いつも1号が座る椅子を取り戻してある。これまでのバネじかけの事務用椅子を実用むき折たたみ式のカタイやつに代える。

#### 6・5

坂本「お前、爆取四条て、知つてゐるのか、知らないだらう。」  
坂本は『警察要監』爆取九条から八・七、六・五・四・三・二・一と読みあげる。そして、各条項ごとに説明を加える。

更に、この爆取は、一般刑法より重いのは、治安の維持を目

坂本「今度の椅子は良いだらう。もたれることはできないし、音はしないし、姿勢も良くなるぞ。」

坂本「お前、そろそろ見放されたんじゃあないか、差し入れもこなくなつたし、だんだん一条に近づいてきたから、皆、こわくなつたんだ。」

坂本「お前の部屋にあつた、トラベルウォッヂの壊れたのはどうしたんだ、お前は、武器を分散しておけとか言つていたのか、いろいろまたでてきた」

小河原例によつて、ちらり、「情報」を流す。  
「延べ二十カ所もガサブチ込んだから、だから、昨日は新聞みただろうと言つたんだよ。」

坂本「トラベルウォッヂはどうしたんだ、あれも、ハンダの跡があるじやないか、あれはどうしたんだ、何とか言つたらどうだ、乞食！」坂本、耳元でドナル。

この日よりタバコ、朝十時、十二時、三時、五時、八時以外はダメ。

#### 6・6

的としているからだ、治安の維持つてお前解るか、わかんねーだろーなー。社会の秩序をまもると言うことだ、お前みたいのを世の中からなくす、と言うことなんだ。だから爆取は重いんだ、明治に出きた法律だ、何か文句あるか、言つてみろ。お前は、四条の共謀だから……。」  
と四条を詳しく一人言する。

坂本は、この時期より、1号の前に座ること少なく、1号の右側に座つて、一人喋べりまくるようになる。坂本の身体を少し前にかがめると1号に触れるぐらいである。

#### 6・6

原「君は、どうして、××を早く除名処分にしておかなかつたのだ、ウム、一番意識の低いやつの所に一番大事な

ものを置くなんて、君の命取りになるぞ！どうだ、何故、除名処分にしなかつたんだ！その辺から喋べれよ、クサトルは、何處で仕入んだ、どうだ、ウム、田舎か、

田舎の兄貴でもヒッククルか。どうだ、どこで仕入た。」

「君は気楽だなーんで、何故結婚しないんだ、何か理由でもあるのか、ウム、土方できなくなれば、田舎で兄貴の世話になるのか、どうだ、兄弟はどうなんだ。」

麻布1号及諸同志の家族状況を詳しく喋べくる。

原「君は、どうして、××を早く除名処分にしておかなかつたのだ、ウム、一番意識の低いやつの所に一番大事な

ものを置くなんて、君の命取りになるぞ！どうだ、何故、除名処分にしなかつたんだ！その辺から喋べれよ、クサ

トルは、何處で仕入んだ、どうだ、ウム、田舎か、

田舎の兄貴でもヒッククルか。どうだ、どこで仕入た。」

「君は気楽だなーんで、何故結婚しないんだ、何か理由でもあるのか、ウム、土方できなくなれば、田舎で兄貴の世話になるのか、どうだ、兄弟はどうなんだ。」

坂本「親はないし、女房はないし、金はなし、お前の弱

#### 6・7

奴らは朝からスポーツ新聞を読んでいる。

午後坂本、コーヒーベースをすりながら、胃が悪くなつたとなげつてゐる。今村、タバコの吸い過ぎですよ、と、パイプの愛用をすすめる。今村は、フィルター様の物に水の含んだ流行のパイプを利用している。小河原は、挨拶状？の宛名書をまだやつてゐる。

味はなんだ、いつまでつっぱっているんだ！玉半で何を相談したんだ、まめそらの筆談は何なんだ、何とか言つたらどうだ、このクソ野郎、オイ、月夜の晩ばかりじやあないんだぞ、覚えとけ！この中年野郎何んとか言つたらどうだ。」

この日より、原は夕食前後にくるようになる。後に解ったことだが、本部で××を調べて麻布にくるのでこの時間にならしく。八時すぎまで、

原 「××は、政治と関係ないことで処分されたのを不服だと言つている。どうだ、君にとつて、この××問題は青天の霹靂だつたようだな、大阪の○○からは責められ、柚左には言い訳をしなければならないし、××は、仲々自己批判しないし、どうだ、のことよく自供させたな、どうやつて、自供させたんだ、ウム、どうだ、自供させる手口をお教えてくれ、どうだ、筆跡など見て、××に間違いないなどと思うあたり、どうだ、詳しく話してくれ。」

「君イー。今度は助らないぞ、爆取四条は確実だ、どうだ、すつかり話せ、証拠がそろいすぎた、ライカンはどうした。どうだ、もう、解つていいんだ、君イー。話をたまえ。ホテルはどうした。何？ タバコ、アソー。そうか、どうぞ、僕は吸わないから、気がつかないが、小

クル、ウム、どうだ、火つけ強盗は絶対に許さない。君が黙つていると一人残らずヒッククルぞ、良いのか／どうだ、何か言うことはないか、君、責任をとりたまえ、責任を。どうだ、ウム、爆弾はいつごろ何処にやるつもりだつたんだ、警察か、どうだ。」

原 「××は、どうしてあんなものをもつていたんだ。××

は一人でやるつもりだつたのか、どうだ、君はどう思う。ウム」

原 「○○のところのおふくろさんと女房は仲が悪いそうだ

が、どうだ、早く氣を楽にさせてやれ！」

原 「××は、五月一一日に君に渡すつもりだつたと言つているが本当か、どうだ、いよいよ、爆弾闘争をやる予定だつたのか、ウム、どうだ、公然機関誌をやめて、いつからやる予定だつたのだ、僕も面子捨てるから、君も面子捨てて喋べれ、どうだ、大田龍のように、革命オジャンになつてしまふぞ／どうだ、もうやめろ／爆弾は良くない。」

原 「蜂左、爆弾闘争の転末、でも書け、手伝つてやる。皆んなつかまと書くんだ、君も書け、裁判所で言うのも、ここで言うのも一緒だ、どうだ。連赤の○○も狼の○○も、裁判で言うならここで言うと言つて書いたんだ、君も書け」

林君火をかしてやつてくれ。サカチヤンを呼んでくれ。」坂本「すずきは自供しているそうじやないか、検事に聞いたらどうだ。もうお前も助からんなー。タバコやめろ！ 時間だ」

坂本この時期より、机をケトバシたり、1号の椅子をケトバシたりはじめる。十時場内へ、

6・8

朝、坂本が場内までくる。5房よりヤジがとぶ、「夜もつと早く帰せ」

坂本「タバコ吸うか、何吸いたい、好きなことだけ言つてんじやないんだよ、このガキャー。これから、タバコ、カップヌードルを買うときは、必ず、この紙に、品名と個数金額を書いて置ぐこと、言ひな。解つたか。黙つていちやーわからないんだ、この乞食野郎」坂本でかいのに二人、巨人・王ホームランの話、小河原水槽をでかいのにドーント機をケトバス。

原 「どうだ、君、考えたか、逮捕状で解るよう皆ヒック

小河原、お茶をもつてくる。1号タバコを要求する。検事

帰る。小河原・今村と代る。

小河原「バクダン、バクダンに聞えたが、何か良いことあつたか」

坂本「何だつて、昨日はバクダンが出来たつて……」  
午後、1号、ニラ・レバを食う。

坂本「クサクで、調べにならない。オイ、息をかけるな。オレも食うんだつたな、六本木は高くついて、二度とイヤだよ、五〇〇円で昼メシも喰えない、オイ、どうしてくれんだ／お前は良じよ乞食みたいに、顔も見たことない奴のを平気で喰つて、金は入るし、仕事しているより金になるじやあないか」

六本木の物価高の話が進む。麻布署前、洋菓子屋。何とか夕食事から検事がくる。1号の食事を、原と小林は見ていく。

原 「君は、パチンコをやるらしいが、君の部屋にあつたパチソコ玉はどうしたんだ、君はいつも、どの辺でパチンコやるんだ。ウム、僕も出張などに行つて、列車を待つ時などやるが、出ないなー。五〇〇円擦るの訳けない。」

どうだ。君はよいのか、ウム」

6・10

坂本「不動産屋が、本部に、電話をよこして、部屋に冷蔵庫はないのかと、部屋代はどうするのだと言つてゐる、どうなんだ、何か言つてやらないで良いのか、冷蔵庫に電気がきて、腐つたら、クサくてたまらん、隣近所の迷惑だ、あるのか、ないのか、どうなんだ。」

「お前がいくら黙しても、××が皆喋べつてゐるんだ。お前は、言つてることとやつてることが矛盾だらけじやあないか、お前はそれでも正しくと思つてゐるのか、このバカ者が。」机をドーンとケトバス、ついに机の足一本コワレル。坂本は夕食後、机をきれいにふいてゐる。

坂本「オラ、あまり、頭をかくな、カミの毛がすごい。これみなお前のだぞ、今度お前がソウジしろ、このクソタレ野郎！」

「どうだ、何か考えたか、ロッキード事件は、だんだん、広がつてゐるぞ、革命は近いのじやないか、河野新党できたし、自民党もついに分裂したぞ、どうだ、もう革命じやないのか、君はどう思う。どうだ、野党連合か、革新連合か、近くできるのじやないか、自民党政府は潰れるとぞ、これは間違いないだろう。どうだ、君はどう思う。

日本の官僚、検察は、世界でも一番優秀で汚職がないとどうだ、爆弾などやめろ、非合法なことをやればかならず追いつめられるぞ、爆弾製造技能者は、一生マークされる。日本の警察からのがることはできない、どうだ、追いつめられて、連赤のようになる前に、やめろ、どうだ。」小河原お茶をもつてくる。1号タバコを要求する。

6・11

午前一時頃、調官二名新たに加わる。調室に入るなり、「オイ、腕組やめろ！」「なんだ、ドジの佐藤とは、こいつを連発している。坂本以下は、ジート様子をうかがつてゐる。

正座で聞け／オイ、」

調室は、六名となり超満員となる。新たに加わった二名は、立つて、威嚇をつづけてゐる。一名は1号のすぐ側で、ウナ、シティル。「腕組ヤメロ！」もう一名は入口で「ドジの佐藤」を連発してゐる。坂本以下は、ジート様子をうかがつてゐるのにじやないか、肩もんでやれ。」坂本「さわつたりするところ訴えるぞ。」「オウ、訴えるなら訴えてみろ、腕組ヤメロ／ヤメナイのか、肩もんでやれ。」1号の肩を力を入

れて握ぎる。1号「さわるな！」「オー、こいつ口きいたぞ」

「ドジの佐藤どうしたんだ」

昼食。久しぶり、これで二度目場内で昼食。

午後三〇分すぎ、机をはさんで、1号の前が入口で「ドジの佐藤」を連発してゐた、四二・三才、1号の隣りが大声でウナル、三七・八才。小河原と今村はこれまで通り入口の机で小さくなつてゐる。

「オイ、ドジの佐藤、47年頃は、ドジの佐藤と言つて大評判だったんだよ、お前聞いたことあるか、オレは、がんも、すぎも、きのも調べたのだ、がんとは名前も同じだし、生年月日も同じ三浦だ」

「解るか、三浦司郎だ」

「お前は親父の葬式に行つたり、ドジバカリ踏んで、革命家失格だ、革命家はパクラレリヤー、もうおしまいなんだ。何も、できないだろう。いちかわも、てつも皆オレが落したんだ。三森だ、ミーさんとオレは、調官主任だ。」

三浦「オイ、ドジ野郎、47年の時は、お前とさらぎを何とか、とつつかまえようとしたが、なかなかしつぽ出しあがらないで、杉とか河野にばかりやらせて、何やつていたんだ」

三浦「オイ、ドジの佐藤、足を組むな、オオ、このバカ、よ

けいツッパツティルよ、こいつは大物じやあないよ。」

坂本「言われたことは聞け、オレの面子を潰ぶすようなことするな！」三森は、何かと1号の身体にさわりたがる。

夕食、小河原、今村、

原 「××は、救対は金がかかつたと言つてゐる。どうだ、意識の一番低いやつに責任もたせることはないだろう。何か一言いつてやれ。ウム、君は、どうして、一番大事なものを意識の低い奴にあづけておいたんだ。どうだ、どこであづけたんだ。」

1号は、おおよその時間を見はからつて、タバコを要求する。奴らは椅子に座ると時計を必ず、内側にする。

原 「もうタバコの時間か、小林君、お茶をもつてきてくれ。君は酒をのむらしいがいつもどの辺でやるんだ、どうだ、福島には、うまい地酒はあるのか。」

九時、坂本場内にくる、この日より、1号の出し入れは、坂本中心になる。

午前中は、これまで通り、坂本中心、調べと言つては雑談が多い、坂本はどうも脇役にまわつたようだ。

三浦、三森は、早く一時、二時頃もある。

三浦「オイ、ドジの佐藤、がん知つてゐるだろう。あいつは、

言わなくて良いことまで、ペラペラ喋べりやがつて、せつかく、俺がポンボにしまったやつまで喋べりやがつてどうしようもない奴だったよ、すぎはなー、大変だったらしいぞ、このネクタイ、オラ、よく見ろ、このネクタイから、タラ、タラ汗が流れたらしいぞ、そりやーお前、いくらうまく、セツトしたつて、いつバク発するか解らんから、汗かくわなー、あいつの女房はなかなか良い女房だつたなー。すぎには、東拘にも、何回か会いにいつてやつたよ。お前も、起訴されたら、東拘まで会いにいつてやるぞ、どおだ、出てくるか、調べはないんだ、良いだろう。世間話しよ、世間話し、きのしん、あれは紳士だつたなー、お前解るか、職質だよ、職質」

そばで三森「○○もその手でどうだ。」

三浦「調べやつてゐるんじやあないんだ、聞きたいことあつたら何んでも言つてみる。72年当時のさらぎ派のことなら何んでも知つていて、お前より知つていて。オイ、タバコ、吸えよ、タバコ、」坂本「タバコなんて吸わせるな」

三浦「イヤアー。こいつは、タバコ吸わした方が良いんだ、火つけてやるからもつと吸えよ」

三森「いつちやん知つてゐるか、なー。いちだよ、いち、た

いら知らないのかー。テツもオレやつたんだよ、テツは元気か、もう出たろう。お前テツ知つていいんだろう。いちは悪いことしたよなー。新聞発表しないと言つて約束で自供させて、オレの上司のやろうオレにも、黙つて発表しやがつて、あのときは、まあしようがない。といつてくれたよ、どうだ、佐藤、ミーさんとオレだけにでも、何か教えてみろ」

三浦「カソスケ、このバカどうしようもない。コーヒーデのみに行こう」

三浦「オレも福島出身だよ、お前爆弾だけは、やつていだらうな。やつていたら大変だからな、お前肩はつているのじやあないか、お前、ドトウの赤羽自衛隊をねらつて自爆したの知つているか、あれはすごいぞ、親父が見に来ても、解らないんだ、自爆したやつの写真もつてきて見せるか、お前が見たいと言つたと写真もつてきてやるぞ、どおだ、見るか、お前一発ぐらいどこかでやつているんじやあないか」

原「六月十五日、ブンド系はデモをやるらしいぞ、三〇〇ぐらゐは集まるだらうという話だ、45年頃につかまって

くる奴は、後五年もすれば、必ず自民党はつぶれると言つていたもんだよ。どうだ、ロッキードで自民党は潰れるんじやないか、ウムどうだ。佐藤君。革命は近いのじやないか、ウム、どうだ、君はどう思う。」

「ねむくなるのは、座つている姿勢が悪いからだ、○○君は腹の具合が悪いと言つてゐるそうだ、○○が良く作つてもつてくるから、食いすぎじゃないか、君はどうだ、胸をはつて姿勢をよくしろ。」

どうだ、何か変つたことはないか、俺は岩手の職人のせがれだ、君は福島だつたな、福島の農業はどうだ、田舎に帰るつもりはないのか、革命オジヤンになつてしまふぞ、足を洗つて、田舎に帰つて、親父の仕事を手伝えと言つてゐるんだ、君も田舎に帰れ！」

6・13

三浦「オイ、ドジ野郎、友達はどうなつても良いのか、お前みたいのは、一〇年になろうが死刑になろうが、かまつちやいられない。友達だけはお前助けろ、この野郎、北海道に行って日熊に喰われてこい、このバーカ。」

三森「そうだ、こんな奴、一〇年になろうが死刑になろうが、当たり前だ、○○や××まで道づれにすることはないんだ、何とか言つたらどうだ、友達を見捨てようなんて、とん

でもない奴だ、それでもお前指導者か、クサトールはどうしたんだ、クサトールは、エエ、××まで四条にすることはないんだ、一言言つてやれ、オレが一切責任とります、と、一言言うだけで良いんだ、一言、どうなんだ、何とか言つて見ろ、友達を見殺す氣か、それで見せるか、お前が見たいと言つたと写真もつてきてやるぞ、どおだ、見るか、お前一発ぐらいどこかでやつているんじやあないか」

三浦「福島の人間はロクなのいないよ、吉展ちゃん事件の○○や、爆弾の佐藤や、人殺し、強盗のたぐいしか、福島はいないのか、こんな悪いやつはどこにもいないよ。福島島はホントにロクな奴いなし」

三浦「そうだとも、こんな悪いやつはどこにもいないよ。福島島はホントにロクな奴いなし」

三森「オイオイ、俺も福島なんだから、こいつと一緒にされんじゃないのか、早いところみませんとか、○○の○○はオレのものです、とか一言で良いんだ、一言も言わないなんて男じやないぞ、○○の○○は、あまり良くないらしくじやないか、お前が一言喋べれば、皆んな助かるんだ。何とか言つてみろ」

三浦「お前なー。○○は良いよ、好きでやつてゐるんだから、なー。○○と女房は好きでしかも、知つていて一緒になつたんだから良いよ、ところが子供とお袋さんはどうするんだ。子供には責任ないだろう。女房にもしものこと

あつたら、明日からどうやって喰つていくんんだ、オイ、どうなんだ。子供とお袋さんは関係ないだろう。関係ない人今まで責任とらせる事はないんだ、カансケ、このバカ、どうしようもない大バカだ、バカ、バカ、のバカ野郎、バカ！」

坂本「イヤー、私もこの前そう言つた所なんですよ、全く同じになつた、佐藤、誰が見ても、お前はバカなんだ」

三森「お前なー、人の話をよく聞けよ、良いか、丸の内の三菱の時のみてみろ、何んの関係のない人が何人も死んでいるんだ、お前ら、革命だからと言つて人を殺すことはないだろう、どうなんだ、丸の内の時の写真もつてきてやろか、見るなら明日もつてきてやる。ドトウのやつでも良い、バクダンだけはやめろ、解るだろう。オイ聞えているのか」ドンと肩をタタク。

「どうだ、少しは喋る気になつたか、○○もスグ捕まるぞ、何、トイレそとかよし、一緒にやろう。オイサカちやん呼んでくれ」

「君、どうだ、これでもつれてこようか、ウム」トイレに貼つてある全国指名手配ポスターの写真を指さす。

「○○の女房も活動家だったそうじゃないか、ウーム、女房は、仲々気が強いと言う話しだよ、ウム、どうだ、君は知つてゐるか。○○君ところも大変らしいぞ」

「君たちはジンサとはどうゆう関係なんだ。統一戦線だつたのか、どうだ、エルゲーとはどうなんだ、どんな関係だ、ウム、どうだ、エルゲーとはどうゆう意味だ、どうだ、お教えてくれ、ウム」

6・14

三浦「オイ、佐藤、タバコでも吸えよ、ケツからヤニでも出るぐらい吸つてみろ」三森は、この日より入口の机で小説を読んでゐる、『猿飛佐助』と言うことらしい。調べの時は1号の脇にくる。

三浦「お前もきのしんぐらいの線まではやれ、俺に手紙でも書いてくれ。誰れにも見せないから、手紙を一つ書いてくれ。お前ロケットの話、知つてゐるか、47年はロケットまでつくつたんだつてなー。あれだつてお前、俺がポンポに仕舞つたんだ。解るか、事件になつていいだろ。お前は、何だ、知らないのか、ドジの佐藤ージヤなー。お前、シャー、立川も知らないのか、ウー。立川だつて、あれだつて、表にでていいだろ。それぐらいはできるんだぞ。助からないぞ。

今回の四条これはダメダ、これはもう事件になつているんだ。これをポンポに仕舞うわけにはいかんよ。処分権限は検事にあるんだからな、もう事件になつてゐるの

は、ダメなんだ、戦前なら警察も○○○（忘れた）できただんだ。戦後は○○○は検事だけだからな。お前実験やつたろう、これはまだ、事件になつていらないんだ、これなら俺のポンポに仕舞えるぞ、これぐらい話せよ、どこでやつたんだ、なー、カансケ、なんだ、野郎、本読んでじるのか。」

三浦「俺は、がんと生年月日同じなんだよ、名前も、しろう、で同じだな。あつ、生年でなく月日だけか、○月○日（忘れた）何んだ、がんはまだ東拘か、すぎはどうしている。あいつら、またやり出しても、バクダンはもうやらないよ。きのしんなんかは、絶対やらないなー。すぎだつてやらないぞ、そう言えば、きのさんには胃の具合みてもらつたことあるなー。きのさんは良いこと言ってくれたぞ、医者に敵も味方もない、人の病気を見るのが商売だ、と言つてたな」

坂本「その、きのさんと言うのは医者ですか」

三浦「ウン。どこの大学だつたかな、ちゃんと医者の免許をもつてゐるんだ。なーー。佐藤、どこの大学だつた、このバカ、そのぐらい関係ないんだ！」

三浦「佐藤、B知つてゐるだろ。Bあいつは、どうしたんだ。田舎に帰つたのか、あさだ、なー、あいつは、お前、毎朝交番に新聞をどさーと頼んでは、新聞配達をやり、

女房ともしょっちゅう会つてしまひしな、交番も抜けているよ、な、指名手配されてゐるやつが毎朝二度も三度も顔合せていて解らなかつたと言うんだから、○○知つてゐるか、あいつの女房の親父は、警官だよ、あいつも、時効すぎまで逃げていたら六〇だな、早いとこ出頭させろよ、きのさんの線でも言ひよ、時間と場所解つて、職質すると言うやつ、なーー。ミーさん。」三浦ジーと1号を睨みながら、うなずく。

三森「お前、××のやつだけは責任とれよ、お前責任とらなーいと○○まで泣すことになるぞ、○○を五年も六年もブチ込んでみろ、どうやつて喰つて行んだ。女房やお袋には、○○だけが頼なんだ。生活できなくなるだろ。生活!!○○可愛そだとは思わないのか、お前みたいに一人野郎は、どうなつてもかまわないんだ。お前みたいなバカは、今死んでも、誰れも、悲しみもしないんだ、○○はそういうかないんだ、わかつてゐるのか、○○に責任とらせることないんだ、このままだと、××も、皆んな四条で行くことになるぞ、お前の責任だぞ、それでも良いのか、お前が責任をとる、と一言云うだけで助かるやつも出てくるんだ、オイ、佐藤、どうなんだ、友達も助けられないのか、この野郎／写真もつてきて見せないとダメだ」

「なんだ、お前友達を見捨てんのか、それじや俺も黙つていられないぞ（腕まくりをする）この野郎、お前日本人か、友達を助けられないで何が革命だ、お前、それでも人間か、第一何とか言つたらどうだ、お前には人情もないのか、お前日本人ではないな、俺は世の中良くするため、わざわざサツカンになつたんだ。こんな下司野郎見ていると、俺はガマンできない。ドジ・ドジの大バカ野郎！何とか言つてみろ、オレはな、藤井丙午もドナリチラシたことがあるんだ。いまでも年賀状くるよ。俺には恐いものはないんだ！野郎、○○はどうするんだ、××のものを何とかしろ、オオー、もつと怒れよ、もつと睨んでみろ、それからどうした、そうやって一晩睨んでいろこのバカヤロー。バーカ」

夕食後

原 「フランス経済学などと言うのはあるのか、聞いたことないなー、どうだ、フランス経済学とは何だ、一つ教えてくれ、××はよう覚っているなー。部屋の構造から、位置まで、図解で示している。どうだ、除名はいつだったんだ、していなかつたのか、ウム、どうだ、××をいつ除名したんだ。ウム、」

坂本、三森、1号を場内へ、

6・15

三森「検事は少し喋べりすぎじゃないか、こいつに、皆んな情報やつて。」

三浦「良いんだ、こいつには何んでも教えてやれ、お前女はどうしたんだ、女。新宿の女だよ。ホラ、成子坂下の、ウー。知らないのかー。もう○○（忘れた）と結婚したよ。良い年をこえて、お前又倉つかんで一人寝か、俺なんか毎日自家用車だぞ、（「だいぶ中庫じやないか。」

三森）中庫でもなんでも、自家用は自家用だ、お前はどうしているんだ、トルコか、お前には、家庭のよさが解らないんだ、このバカ、俺なんか、いくら遅くなつてもちゃんとお起きて待つてくれるんだ、一杯のんで、それから寝るんだ、ウチの息子はな、専大の府属高校だ、お前みたいのもういないだろうから、このまま行けば、息子も専大に入るようになるだろう。」（「何んで、さらぎ派は専大多いんだ。」三森）「このバカみたいのが、いるからじゃないのか、××も専大だろう。オイ、どうだ、その辺のところ話してみろ。」

三森「お前田舎の高校はどこだ、安達か、俺は郡山だよ。お前、田舎に帰り、本名で仕事してしたり、革命家失格だぞ。パクラレリヤー何もできないだろう。もうやめろ、お前の黙否は何のためだ、お前黙否の理由もわからない

でだまつてゐるのか、弁護士が言つたからか、どうなんだ、そのぐらい自分で判断できないのか、いちいち、誰れかと相談しないと喋べれないのか、お前それでも指導者か、オイ、肩もんでやるか、○○のことどうするんだ、○○可愛そだとは思はないのか、オイ、佐藤、××のものはどうしたんだ、お前が、もつて行けと言つたのではないか、お前が黙つてるとみな爆弾にされるぞ、お前が責任りますと一言いえば、火取になるかもわからんのだ、何とか言つてみろ。このバカ、何とか言つてみろ！」

原 「君、どうだ、蜂左でいつてゐる爆弾闘争と言うのは、何だ、これは君が書いたのだろう。君の書いたものは、スグわかる。いとえが間違つてゐるからな。どうだ、政治警察との闘争と言うのは何んだ、別件逮捕は世論に支持されているとあるが、そうか、別件は世論では反対しているのではないか、別件などと言うのもともといのだ。どうだ、××のものは、ウム、××は、きみにもつてゆけと言われたと言つてゐる。どうだ、君がもつてゆけと言つたのか、ウム」

午前中弁護士接見を要求する。

三森「坂本さん、警察要覧もつてきて下さい。」  
坂本「どうするんですか、私も、この前爆取のところ読んで聞せたんですよ」

三森「もう一度 教えてやるもつてきて下さい。オイ、佐藤刑訴法（？）は、○○で刑は半分になつて、情状で半分になつて、○○で半分になるんだ、五年（？）以上のものでも、五年の半分で二年半、二年半の半分が一年三ヶ月、こういうことになるんだよ、こうなると、保釈も、猶予もでてくるんだよ。解るだろう。どうだ、われわれに解つてもしようがないんだ、裁判官に解るよう何か書けよ。何んでも良いから、××のものは自分が責任とります、と一言で良いから書け」坂本「公安に要覧ないでですよ、誰れか使つてゐるんじゃないですか」

三森「お前の一言で、四条か火取か、決るんだ、何か言つてくれ、○○も助るんだ、このバカ、肩でももんでもやるか（「こんな奴死んでも良いんだ、」三森）「緑町のホラ知つてゐるだろう。何んと言つた、あいつの迷惑にならないように、休み時間を見はからつては行つてやつたんだ、あいつなんか生田の九条で、バッヂリパクレたんだ、あいつは、生田の先輩だろう。そうゆうこともあるから、

俺はパクラなかつたんだ、事実を解りやあ、良いんだよ、

事実を言つてみろ、ボッポに入れるのは何んでも入れる

から、カансケ言つたように、四条と火取じやー、エライ違ひだぞ、解るか、五年以上も行くか、保釈の猶予で、すぐ出るのじやーでん（三森の真似）違うぞ、お前みたいのは助からんで良いんだ、○○と××は助けろ、緑町のヤツだつて、俺でなかつたら助らんぞ、俺だから助つたんだ、お前より、よっぽど、警察の方が人情にあふれてゐるわ、このバカ。」

「日曜日は、いろいろあつたらしょなー。なかなかあそこも大変らしい。どうだ、君イー。何か言つてやることはないのか、○○君は刑事に感謝してゐるらしい。日曜日なのにオレも電話に呼び出されてなー。お袋さんが面会にきてゐると言うのだよ、ウム、小山先生は日曜日で仲々つかまらないし、家まで一緒に行つたらしいが、どうだ、早く楽にしてやれ、四条について何か言うことはないのか。実験は、どうした。実験。ウム、ホテルは、どうゆう名前でかりたんだ、どうだ。」

6・17

三森「お前、なるちゅう知つてゐるか、なるくまだよ、ドトウのなるちゅうは、あそこはどうなつてゐるんだ、お前

ら関係ないのか」

三浦「お前、どこのホテル使つたんだ、昼食はどうしたんだ、昼めし、何んだ、合宿か、検事に聞いてゐるだろ、どうなんだ、どこのホテルだ、××、あのやろうはどうでも良いから、○○だけは助けろよ。」

「お前ら、さらぎと別れたとき巣鴨にアジト作つたろう。あのマンションの車庫でいつも張つていたんだ、さすが、お前はついに一度もこなかつたな、××の野郎、車できて、三、四人乗せて、出てきやがつたから、直ぐつけたんだが、あの野郎、一方通行出口から入りやがつて、俺も入ろうとしたら、ちょうど向うから車がきちやつて、あのときはまいつたなー。あのマンション車庫で張つたの管理人も解らなかつたらしいな。生田がどつちに行つたか、と言うのでなー、俺は佐藤の方だ、と賭けて、お前の所だけ張つたんだ、まあー。あいつも自殺したようなんだからな。公安じや、生田の自殺だ、と言つていたもんだよ、お前、××は、何んで除名したんだー。」

「ブンドのデモはたいしたことなかつたらしい、一〇〇も集まらなかつたと本部の刑事は言つてゐる、早く出て、何とかしないとしようがないんじやないか、どうだ、君の考えを聞かせてくれ、ウム、昨年も、五月四・五回合宿やつたらしいが、何処でやつたんだ、ホテルか、ホテ

くると言う奴だからな、ヒドイモンだよ」「（「お前らやつてゐるのは皆そりよ、皆共同便所よ、なー佐藤、そりだらう」三浦）

「佐藤の所はどうなんだ、女はいないのか、かくさはい

まどうなつてゐるんだ、お前知らないのか」

三浦「ドジの佐藤、どうした、友達のこと気になるだろ、助けてやらないので、いつまで黙つてゐるんだ、きのくんの線まではやれ俺に手紙で良いから、書け、○○○お前、青梅の医者知つてゐるか、何んと言つたかな、デカ

ーイ病院だつたな、診療所か、否、老人ホームかな、なんかそんなような病院だつたな、あそこにいつたとき、

だつて、お前刀一振りでつき出したんだ、ありやお前銃刀の現行犯だよ、妊娠した奥さんの腹の中に入れて、かくし持つてゐるんだ、コロンダラ危ないから、出し下さいと言つて、刀を出させて、市の文化財委員会（？）に登録させ、そして、署に届出させたんだ、親の片見だと言うからしようがないよな、俺が、署まで一緒にいつて、手続きつてやつたんだ。お前だつて、実はこれこれなんですと喋べつてみろ、どうせ大いしたことはないんだろ。喋べつてしまえ、イーイ、手紙も書けない、喋べれないと、このバカ、何とか言つてみろ。ドジヤロー、いくら黙つてもダメナンだ、××は喋べつてゐるし、お

この日弁護士と会う。

三森「小河原さん本部に帰つて下さい。○○（忘れた）がそりいつてゐるから、明日からこないで良いです」

三森「オイ、佐藤、検事から聞いてゐるだろ。この前のこと、曜日のこと、どうなんだ。お前、法大のM知つてゐるか、あいつは、スラーと、自分から話し出したんだ、お前も何処かやつてゐるんじやないか、Mのように話してみろ、あいつも、ヒドいやつだな、女を革命のために利用した、なんて言つて、あいつらは、離婚したそうだよ、子供までつくつて、利用したなんて、とんでもないやつだ、そり怒れないか、ウウ、かくさのようないもあるしな、あいつらは政治だの革命だのと言つるのは無いんじやないか、○○は○○とひついて、○○はまた○○をヒッカケて

前が黙つてゐると○○が責任とするようになるんだ、日曜日の話聞いたろう、どうなんだ。」

三森「こいつに爆弾なんて、出きないよ

「……いるようじや、爆弾どころか、だいたい革命家失格だ、このバカ、でんでんダメだ」

原  
一君、どうだ、クサトールは、どこで仕入た、ウム、田舎か、ホテルはどこだ、新橋か新宿か、どうだ、フームよし、二一日には、引導渡しにきてやる。「わざか二〇分ほど帰る。

○分程で見る

三  
六  
一  
九

つては、お前がやつてたんだよ。お前弁護士に聞いてるのか、喋べっていいですかと。喋べるか喋べらないかぐらいい、自分で判断しろ、がんにしろ、すぎにしろ、皆自分で判断しているんだ、弁護士とか、組織とか、関係ないだろう。起訴されるのはお前なんだ、弁護士が黙否しようと言うのは、裁判で、弁護士の筋書きでやりたいからなんだ、いちいち弁護士に聞かなければ、喋べれない、お前ガキじゃないか、こいつは、ホントに大物じゃないよバカ、お前、47年は、誰が一番早く、自供したか知つているか、お前は何も、聞いていないんだろう。バカだ

からな、Sだよ、S、俺はSを落したけど、Kみたいにはしていないからな、お前解つていいのか。

爆取か火取かどつちが良いんだ、このバカヤローー！

何とか言つてみろ！タバコだの、トイレだのふざけたことばか言つているんじやないんだよ、黙否なら、何も喋べるな、白井を見ろ、白井を、白井は、トイレも口きかないで、立つて、指さしたと言うぞ、お茶だつて、○○さんくんできたのはのまないで、看守が来て、お茶をついでくれると、わざわざ礼をしてのんだと言うよ。黙呑するなら、白井みをつてこらー（云々）（云々）さしは

なげていったと  
て。チエッ、  
ドジ野郎！」

ダメだぞ、クサトールは、まだ、どこかにおいてあるんだろう、どうなんだ、全部喋べてしまえ、実験はどうしたんだ、実験したところに遊びに行つてみないか、ドライブだよ、ドライブ、○○署の坂口な、俺の友達なんだ、解るか、○○を調べているのは坂口なんだ、どうだ、何か伝えることはないか。お前、親の気持知らないのか、お前が、俺が全部責任とると、一言云つてやれ。坂口に話して、俺が直接○○に会つて話してきても良いんだ、

お前が一筆書けば一番良いんだ、喋べるのいやだつたら  
書け、ウ、」（何んとか言つたらどうなんだ、この死ね  
坂本）「お前なー、お前が勝手に死ぬのはかまわないん  
だ、友達まで、道づれにすることないんだ。○○は可愛  
そうだと思わないのか、この人でなし。」

この日より検事こない。夜

三浦「カップヌードル食つたら、腹がはつてしようがない。  
こいつが、自弁と官弁食つて、何んで、俺はカップヌー  
ドルで我慢しなきやーならないんだ。こりや胃悪くする  
なー」

「お前もバカだなー。死んだやつを生き返すことないだろう。××は、何んであんなものもつていたんだ、お前あづけたんだろう。どうなんだ、なんで、処分させなかつたんだ。」

「こいつはダメだよ、友達も助けられないんだから、友達より、面子の方が大事だとよ、」

「お前、東拘に行つたら、会にくるか、それぐらい約束しておけよ」「」

「お前もバカだなー。死んだやつを生き返すことないだろう。××は、何んであんなものもつていたんだ、お前あづけたんだろう。どうなんだ、なんで、処分させなかつたんだ。」

「お前もバカだなー。死んだやつを生き返すことないだろう。××は、何んであんなものもつていたんだ、お前あづけたんだろう。どうなんだ、なんで、処分させなかつたんだ。」

三浦「お前黙つていろると××の自供通りになるんだぞ、それ

しておけよ

で良いのか、××の自供通りになると「言うことは、四条  
は生きていると言うことなんだ。機関紙でも、爆弾闘争  
言つてゐるし、どうなんだ、実際は、お前の爆弾は死ん  
でいるんじゃないのか、どうなんだ、そりだらう。お前  
が黙つてゐるばかりに死んだものまで生きかえらすこと  
ないんだ、昨日も言つたろう。爆取にするか、火取にす  
るかは、お前が一言でも喋べるかどうかにかかるつてゐる  
んだ、××の自供だけでも爆弾なのに、何んでもそろつ  
ているじゃないか、ウー。爆弾の七つ道具全部そろつて

坂本「佐藤、お前黙つていって、何か得するのか、お前バクダ  
ンだけはやめろよ。バクダンじや、誰れも恐くてついて  
来ないだろう。」

三浦「お前○○知つているんだろう。○○の奴は、交通違反  
で、警察にきて、始末書を書いて、スイスイと署をでて  
いつたと言うんだよ。警察も警察だよな、○○の写真を  
ドアに貼つておいて、目の前に本人おいて逃がしている  
んだからな。イーイ、調べ官は、ドアを背にして、○○

-71-

は、自分の写真を見ながら、始末書を書いてたわけだよ  
な、そうゆうことあるんだ。

俺も、調べていて、四トロどうのこうのと言うから、  
俺は、ふざけるな二トロだろ、と言つて笑われたことあ  
るよ。そのころは、たまきから、公安にまわつたばかり  
だつたからな、オイ、佐藤、どうだ、少しは喋べれ、○  
○知つてゐるんだろう。○○は親から○○万出してもら  
つて、○○やつてゐるらしいじゃないか、お前知らない  
のか。

三森 「お前、起訴は間違いないんだ、どうだ、二三日か二四  
日は、ドライブしないか、どこか山にでも、行くか、肉  
を買って、ナベをもつて、なーミーさんどうだ、検事も  
一緒によ、起訴されてしまえば、もう調べはないんだ。  
どうだ、実験やつた山に皆んなで行つてみよう。○○  
も、一日がかりで、検事も入れて皆んなで行つたんだ、  
どうだ、佐藤、お前も東拘に行つたら、もう外に出れな  
いんだぞ、ドライブぐらいは良いだろ。」

原 「何か言うことあるか、調書を取るがどうだ、喋べるか  
ウ、よし。オイ、小林君、刑事呼んでくれ」わずか五分  
ぐらい。

## 6・22 東拘移管

左記被告事件につき公訴を提起する。  
(勾留中求令状)  
昭和五年六月二二日  
東京地方検察院  
検察官 檢事 原

武志

本籍 東京地方法院  
住居 東京都荒川区南千住七丁目二九番三号 小松莊  
職業 無職

佐藤秋雄

昭和一六年一〇月一日生

公

訴

事

被告人は、前田正治、鈴木実吉ほか一名と共謀のうえ、業務その他正当な理由による場合で  
ないのに、昭和五〇年五月四日ころから同五年六月二日までの間、東京都港区新橋一丁目二  
番六号新橋第一ホテル客室、同都品川区大井二丁目二〇番一二号橋荘八号室及び同都大田区中  
央八丁目四三番一〇号安島荘鈴木実吉の居住において、爆発性のある劇物である塩素酸ナトリ  
ウム約三三グラムを所持していたものである。

毒物及び劇物取締法違反 同法第二四条の三、第三条の四、同法施行令第三二条の三、  
刑法第六〇条 罰罪

毒物及び劇物取締法違反 同法第二四条の三、第三条の四、同法施行令第三二条の三、  
刑法第六〇条

左記被告事件につき公訴を提起する。

昭和五一年六月一日

起

訴

状

(勾留中)

東京地方検察官 検事 原

東京地方検察官 検事 原

武志

東京地方裁判所御中

本籍 大阪府大阪市大正区北恩加島町三四番地  
住居 神奈川県川崎市高津区新作五一二番地三 第六伏見荘  
職業 工員

宇都美次こと

新里良光

昭和一八年一月五日生

公訴事実

被告人は、尾崎力及び竹谷俊一と共に謀のうえ、治安を妨げ、かつ、人の身体・財産を害する目的をもつて、昭和四六年一〇月二三日午後一〇時三〇分ころ、東京都板橋区栄町三五番三号警視庁板橋警察署養育院前派出所裏に、トリニトロトルエン、ピクリン酸ナトリウム、塩素酸ナトリウムを混合した爆薬を鉄パイプに充填した時限装置付手製爆弾を装置し、もつて爆発物を使用したものである。

罪名罰則  
爆發物取締罰則違反 同罰則第一条、刑法第六〇条

発行  
ミットの会